

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(6)

阿部 聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 6

Sei Abe

要約：本稿は、前号に引き続き『豊橋地方空襲日誌』第三冊の2月15日から同3月5日までの記述を対象とする。2月16日から米軍による硫黄島への総攻撃が開始され、16日、17日、25日には関東地方全域の飛行場や航空機工場に対して第58起動部隊による艦載機攻撃が行われた。また、大規模爆撃も2月15日、29日、25日、3月4日と繰り返され、東京や名古屋の航空機工場だけでなく東京市街地もさかんに爆撃された。2月25日の爆撃にはグアム島に進出した314航空団が新たに参加し、東京市街地にE46、集束焼夷弾を大量に投下した。この頃から米軍のB-29による対日爆撃は変化の兆しをみせるようになる。今回は、艦載機攻撃、B-29の大規模爆撃、気象観測爆撃、写真偵察の動向に加えてレーダースコープ写真任務についてもふれながら日誌の記述を裏付けていきたい。

キーワード：大規模爆撃、艦載機攻撃、気象観測爆撃、写真偵察、レーダースコープ写真撮影

(前号よりつづく)

二月十五日(木)

(91) 中食後暫くすると、志摩半島の南方洋上を北進する敵機ありとの情報が東海軍から出たので、^{いよいよ} 弥々来たなと待機についた。空は薄曇りの上に所どころに雲があり、視界は余りよろしくないが、敵の動静位は見へさうなのが何よりだ。

次々の情報で敵の所在を胸に描いてみると、一時三十五分、警戒警報が発令された。弥々来たなと東を見ると、敵め、けふは編隊を組まずに浜名湖附近から分散侵入したと見へ、先づ東南から敵一機が雲を曳いて西進する。それと交叉するやうに、東から南に向ふやつが東南で転回し真上に迫つて来た。待避の合図をうつと、殆んど同時にガワガワガワの落下音だ。それ爆撃といふまもなく、地響きたてて炸裂した。その響きから見ると、先日の飽海より近いらしい。見ると向山辺に当つて黒煙りが濛々とたち上つてゐる。この頃漸く空襲警報が発令されたが、

それつ切りどうしたことかラジオが聞へなくなつて仕舞つた。

暫くすると、東の山の向ふで爆弾であらう連続五六発の炸裂音が聞へたと思ふと、敵一機が姿を現し北寄り西に進んでゆく。それと殆んど同時に東から西に向かふ敵の四機がある。更に東から一機、南から二機、北から一機が頭上めかけてやつて来た。大きいそぎで待避を打ち自分も壕にもぐる。こやつら十分近くも上空を乱舞し、どこにか投弾したであらう遠くから炸裂音が壕まで聞へて来る。漸く爆音が遠退いたので出て見ると、石巻山の方からまた連続五六発の炸裂音が地を震はして聞へ敵一機が西をむいてゆく。(日誌の著者による頭注-豊川町麻生区に投弾したのたといふ。それもおしげもなく十余発一所に落したのださうだ。)こやつが投弾したに違いない。二時二十分、南方を西から東南に逃げてゆく一機がある。曳いてゐる飛行雲がとても鮮かだ。それと別に真上にやや東寄りを北に向ふ敵一機がある。これを味方戦闘機が追かけてゐる。やがて雲で

見えなくなると、石巻山の方から機関砲の音がバリバリ雲中に聞える。二時五十分、東よりを南に向ふ敵の四機編隊がある。大方そのまま南方に脱去するつもりだらう。その頃、新手の二編隊が名古屋をめざし迫つて居るとの情報だ。間もなく渥美半島方面から爆音が聞えて来たが、雲のため姿が見へない。忽ち恐ろしい爆弾の炸裂音が聞えて来た。高師よりは遠く老津・杉山辺りかも知れない。慌てて待避したが間もなく通過。三時、敵機も追々脱去したと見えて空襲警報の解除を見たが、またまた一機づつそここにうろついて居らしい。

最後に名古屋を襲つた敵も、三時三十五分頃、豊橋市の附近を南進中といふが、姿は勿論爆音さへも聞へない。かくて三時三十五分、警戒警報も解除になった。

今日の空襲は、今迄に比を見ない程の激烈さで、頭上に何回敵を迎へたか其数さへ覚へがな位、次々に遠く近く爆弾は炸裂する。高射砲はうなる。味方機が迎へうつ。真に息詰るやうな気持ちの連続だった。殊に最初の爆弾で度胆をぬかれた女子供はすっかり震へ上つたらしい。微弱ではあつたが、爆風はこの附近まで及ぼし、戸障子は鳴る壁土は落ちる始末だから近くでは損害も大きからう。気の毒なことだ。済んでから聞くと、この爆弾は向山動物園の東方畑地に落ち、爆風で二三家屋が倒壊し、死者三四名、重軽傷者多数を出したといふ。どんな風か明朝にも見にゆき今後の戦訓としやうと思ふ。

主力は名古屋に、一部は次で静岡及三重県境に来襲、神宮は御安泰。来襲六十機 撃破十七機

(92) 今夜もまた起こされるものと覚悟して寝たところ、まだ眠らない午後八時、警戒警報が静かな夜空に鳴り出した。そらこそと起きいで合図の太鼓を打つて廻る。初めの情報をききもらしたので進入路など分らないが、侵入した敵は二機で、内一機は豊橋附近から東北進し、他の一機は御前岬附近からこれも東北進の模様だとて、僅か十分許りで警報は解除になった。何れ東部管内に向ふか、それとも南方



第31図：名古屋発動機製作所の敷地と2つの照準点
(出所)「作戦任務報告書」No.34

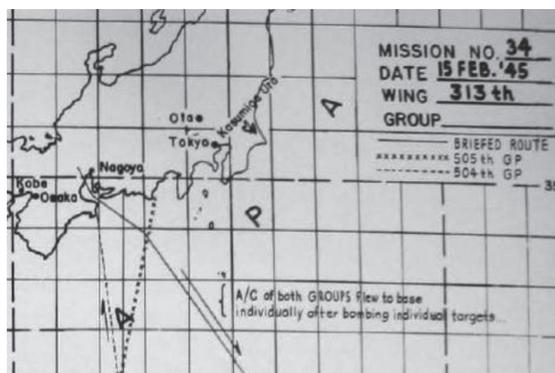
洋上へ脱去するつもりだらうが、あつけなく済んでまづよかつた。

侵入一機 静岡に投弾 脱去

[解説] 2月15日の日誌は、13時30分の警戒警報の発令からはじまっている。この日、第73および第313航空団のB-29、117機は三菱重工名古屋発動機製作所を第1目標とする大規模爆撃を実施した。米軍資料によれば、同製作所は、日本陸軍および海軍の戦闘機エンジンの約30%を生産し、そのほとんどを名古屋港にある三菱重工名古屋航空機製作所へ供給していた¹⁾。また、これらのエンジンは、各務原にある川崎航空機岐阜工場にも供給されていた。米軍は、1944年12月13日の爆撃で名古屋発動機製作所の約75%に甚大な被害を与えたものの、その後の写真偵察の結果、被害の大半は修復され、生産活動が再開されたと判断した。爆撃目標には2つの照準点+と⊕(第31図参照。白線で囲まれた工場敷地の北側に矢田川が流れている。また、西側エリアの一部は、現在はナゴヤドームになっている)が設定された。

第73航空団のB-29、89機は、日本時間の15日05時45分から06時32分にかけてサイパン基地

1) Headquarters of XXI Bomber Command, Tactical Mission Report No.34 (5 Feb. 1945)。以下ではTMRを「作戦任務報告書」と記す。大規模爆撃についての記述は同報告書によることが多い。



第32図：2月15日の第313航空団の飛行コース
(出所)「作戦任務報告書」No.34.



第33図：2月15日の爆撃中の写真
(出所)「作戦任務報告書」No.34.

を、第313航空団のB-29、28機が同じく15日06時35分から07時03分にかけてテニアン基地を出撃した。全体として搭載した爆弾は、第73航空団がM64、500ポンド一般目的弾842発、M17A1、集束焼夷弾280発、M76、焼夷弾24発、第313航空団がM43、500ポンド一般目的弾280発であった。指示された飛行コースは、硫黄島と父島の間を北上して、浜名湖から侵入し、足助をIP（攻撃始点）として目標に向かい、爆撃後、伊勢湾から太平洋上へ抜けるというものであった。しかし、往路での悪天候により編隊はバラバラとなり、各機は、その状態で日本本土に上陸した。飛行コースも第313航空団の505爆撃群団は御前崎付近から上陸、504爆撃群団は伊勢湾から侵入した（第32図）。この様子を日誌は「弥々来たなと東を見ると、敵め、けふは編隊を組まずに浜名湖附近から分散侵入したと見へ、先づ東南から敵一機が雲を曳いて西進する」などと記している。

マリアナを出撃したB-29、117機のうち、33機が、日本時間で15日14時02分から同55分まで、高度25,300～34,000フィートから第1目標を目視で爆撃した。投下された爆弾はM64、280発およびM17A1、126発など合わせて104.2トンであった。第33図は、爆撃中の様子である。

工場敷地の西地区および南側の敷地外から多くの白煙が立ち上っている。工場の被害面積は、破壊、構造的被害、その他合計で全面積の5.4%であった。

名古屋空襲を記録する会（1985年）『名古屋空襲誌・資料編』によれば、名古屋地域に来襲したB-29は約60機とされ、千種区、東区をはじめとする名古屋市内および知多郡、西加茂郡、豊川市、豊橋市などに一般目的弾および焼夷弾を投下した。この爆撃での死者は72名、重軽傷者82名であった。なお同資料は、当日投下された焼夷弾について「小型エレクトロン焼夷弾ニシテ・・・殺傷威力相当大ナリ」（15頁）と記している。このM17A1集束焼夷弾は、M50焼夷弾（テルミット・マグネシウム焼夷弾）を110発収束したもので、対ドイツ戦でコンクリートの建物を破壊することを目的に開発されたものであった。

一方、B-29、54機が広範囲の最終目標（浜松、豊橋、伊良湖、宇治山田、尾鷲、串本、松坂など）に145.3トンの爆弾と焼夷弾を投下した。そのうちB-29、11機が浜松を地域を爆撃、M64、50発、M17A1、76発、計25トンを投下した²⁾。第34図の2枚の写真は爆撃前の浜松駅

2) 「日本本土爆撃詳報（地域別）」東京空襲を記録する会（1975）『東京大空襲・戦災誌』第3巻、講談社、957頁。



第34図：浜松駅周辺の爆撃前（左）と2月15日爆撃後（右）の写真

（出所）「作戦任務報告書」No.34.

周辺（左）と爆撃後のもの（右）である。第34図（右）の駅南西側が大きく白く抜けているのは、雲ではなく爆撃による消失の跡である。浜松空襲・戦災を記録する会（1973年）『浜松大空襲』は、当日の爆撃で旧浜松市内の死者145名、重軽傷者114名、旧浜名郡下の死者1名、重軽傷者5名としている（290頁）。この日は浜松飛行場も爆撃を受けた。

豊橋地域に投弾したB-29は、米軍資料によれば2機で、一般目的弾50発を投下した³⁾。豊橋市の記録では、豊橋市の死者は10名であった⁴⁾。また、被害は少なかったが飯田線の豊川に架かる鉄橋が被弾したようである⁵⁾。日誌は、豊橋の町から眺めた爆撃の様子を生々しく記述している。まず、爆弾の落下音が聞こえ、「見ると向山辺に当って黒煙りが濛々とたち上ってゐる」。この頃、ようやく空襲警報が発令された。「暫くすると、東の山の向ふで爆弾であらう連続五六発の炸裂音が聞へた」。B-29が「十分近くも上空を乱舞し、どこにか投弾し

たであらう遠くから炸裂音が壕まで聞へて来る」。退避壕から「出て見ると石巻山の方からまた連続五六発の炸裂音が地を震はして聞へ」、
「間もなく渥美半島方面から爆音が聞へて来たが、雲のため姿が見へない」。『忽ち恐ろしい爆弾の炸裂音が聞へて来た。高師よりは遠く老津・杉山辺りかも知れない』といった具合である。この日の空襲は「今迄に比を見ない程の激烈さ」であった。

なお日誌は、「約六十機来襲、撃破十七機」としているが、米軍資料は、この作戦による損害は、損失機1機、被弾17機、人的被害12名としている⁶⁾。15時00分に漸く空襲警報が解除され、15時35分に警戒警報が解除された。しかし、20時に再び警戒警報が発令され、B-29、2機が侵入、1機が豊橋付近を、もう1機が御前崎付近を通過して、東北に向かったが、警戒警報は10分ばかりで解除となった。2機か1機は不明であるが、東京を目標としたWSM202であろう（第21表参照⁷⁾）。

二月十六日（金）

爆発の現状を見る

昨日の空襲で向山町が爆撃され多大の犠牲者を出したので、今朝未明現状に臨んでその跡を見て来た。その場所は動物園から一二町東方でやはり工兵隊をねらつたのが気流で流されたものらしい。使用爆弾は百K級の小型なもので、其代り十一個も集中投下したといふ。そこは多く畑地で、人家まばらな処であつたが、それでもその附近の民家は、戸障子や壁など大抵やられて仕舞い、中には雨戸代りに蓆を垂れた家もある。中に支柱で持たせてある家も三軒や四軒ではない。

3) 「日本本土爆撃詳報（地域別）」東京空襲を記録する会（1975）『東京大空襲・戦災誌』第3巻、講談社、1012頁。

4) 豊橋市戦災復興誌編纂委員会（1958）『豊橋市戦災復興誌』豊橋市役所、57頁。

5) 名古屋空襲を記録する会（1985年）、15頁。

6) 「作戦任務報告書」No.34。

7) Operational Summary (XX Air Force, Headquarters, XXI Bomber Command, Narrative History, Documents) から推測。以下、「作戦要約」と記す。気象観測爆撃、写真偵察、レーダースコープ撮影などの任務についての記述は、主に本資料による。『朝日新聞』（1945年2月16日付）は、「B29一機は十五日午後八時過ぎ静岡地区、同十一時過ぎ紀伊南部」に来襲したと報じている。この2機はWSM202とWSM203である。なお、3PRM47～3PRM49は、雲のため撮影できなかった（工藤洋三（2011）『米国の写真偵察と日本空襲』175頁）。

第21表：2月15日の気象観測爆撃及び写真偵察機任務

月日	作戦	出撃時刻 (K時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K時)	目標 (地域)
2月15日	WSM200	141809K	141709	150009	(早期帰還)	東京
	WSM201	142039K	141939	150239	(早期帰還)	東京
	73PRM6	150356K	150256	150956	152020K	沖縄
	3PRM47	150359K	150259	150959	151900K	沖縄
	3PRM48	150456K	150356	151056	151756K	沖縄
	3PRM49	150630K	150530	151230	151930K	沖縄
	WSM202	151338K	151238	151938	160237K	東京
	WSM203	151643K	151543	152243	160537K	東京

(出所)「作戦要約」より作成。

犠牲者は、即死子供五人大人三人で、負傷者は、割合に少く三四人だとのこと。これ等は従来の戦訓を重視し壕に入らなかった人達で、余程近くても壕にゐた人達は全然無難だったといふから、待避の信号があつたら壕に入ることだ。それと戸障子を明けてゐた人に損害が少かつたことは大に学ぶべきことだらう。

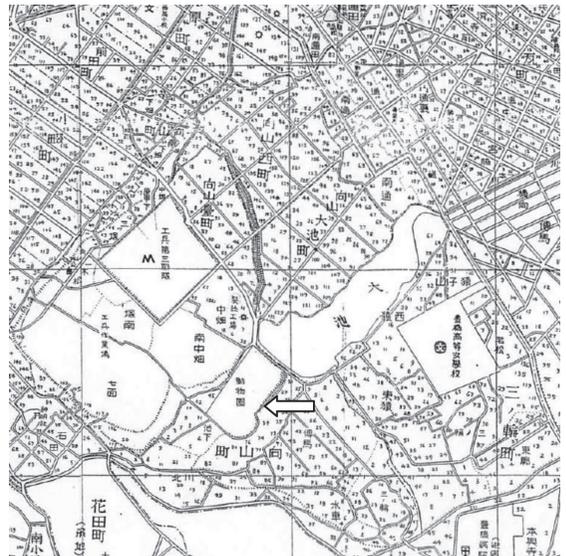
最も幸運だったのは同町加藤興吉君方（組の加藤君の兄）で、老父と妻君が落下地点の畑で仕事中心警戒警報だからと気を赦してゐた処をやられた。突差に身を伏せたので夥しい砂を被りながら無事に逃げおぼせたが、爆弾は僅か数間離れた両側に落ち、爆弾に挟まれた形だったとは何といふ幸運のことだらう。これを見ると人間の運不運程判らないものはないとつくづく感じたことだった。

とりあえず
不取敢、次の手紙を添へ被害地町内会長宛金十円也を見舞として贈り、その加藤君に届けて貰ふやうに頼んで置いた。

昨日数機来襲に際し不幸に戦禍の犠牲となられた貴町内の方々に対し衷心より御同情の念にたえません。同じ神明社の氏子として謹んで御見舞い申し上げます。同封金員は甚だ些少ですが当組員一同の弔意として罹災せられた方々へ適当に贈呈して下さる様御願致します。敬具

向山町内会町殿 瓦町町内会 第二組

[解説] 日誌の著者は、翌16日に被害の大きかった向山町の被災跡を見学した。向山町は、豊橋駅の南東約2kmに位置していた。当時、同町の北には工兵第三戦隊の敷地（現在の豊橋商業



第35図：向山町周辺の地図

(出所)『最新豊橋市街地図』1939年より。

高校、向山墓苑の辺り、現在は向山町となっている）があり、その東に大池があった。また工兵第三戦隊と大池の間には動物園（⇒）があった（第35図参照）。日誌の筆者が住む瓦町は、国道1号線をはさんだ東側に位置していて、距離的にも近かった。日誌によれば、動物園の東100~200mに500ポンド爆弾11発が集中して着弾し、これによって8名が死亡した。15日の爆撃による豊橋市の死者8名は、いずれも向山町の住人であった。後述するように、死者は結果的に10名となった。この日は、たまたま退避壕に避難した人たちに死者はでなかった。

二月十六日（土）

(93) 朝食を済ましてまもない七時四十分、又々警戒警報のサイレンが鳴り出したので急いで合図の太鼓をうつ。情報によると、かねて予期されたやうに機動部隊によるグラマン艦載機で東都管内に侵入して来たらしい。こやつB二十九とは違つて低空に舞ひ降り、爆撃もやれば機銃掃射もやる厄介千万な奴。従てB二十九とは別な対応策が必要だが、不馴のこと故まごつかねばよいがと心配だ。

暫く待機したがこちらに向ふ気配もなく、僅か二十分許りで警報の解除となつたものの帝都方面が案ぜられてならぬ。

侵入機数及行動範囲不明

(94) 午前九時、警戒警報に続いて空襲警報が発令されたので直ちに合図の太鼓をうつ。敵は朝来東部軍管区に侵入してゐたのだが、愈々当管内にやつてくるらしい気配にこの発令を見たのだ。間もなく敵十数機が浜名湖附近で旋回中との情報に、東の空を注意して居ると、敵三機が我が上空に現れ旋回して東北に去つた。暫くするとまた三機がやつて来て、上空を通り西の方で旋回してこれも東北に去つた。十時頃、更に六機が上空にやつて来て旋回して居る。ずつと低空だといつても、時々雲のために見えなくなる。こやつ図太く中々去らないので豪から出ることが出来ぬ。それに初めてなので友軍機と識別が困難で、どれを見ても危なかくつて仕様がな。B二十九と思ふと扱ひ悪い代物だ。高射砲がなる。機関砲が響いてくる。壕にゐても気が気ではない。

漸く敵機も去つたと見え、十時十分、空襲警報が解除になつたところ、五分とたたない内にまたしても空襲警報だ。これは浜名湖附近から北進する敵の一編隊が発見されたからだ。暫くすると、どこをどう廻つて来たのか西南から真上を通つて東北にゆく一機がある。ずつと低空で肉眼でも双発の巨大な姿がはっきり見へる。こやつがグラマンといふ奴に違ひない。憎らしいとも何ともいひやうがない。然しいくら拳骨を固めて見ても中々屈きさうもない（筆者注：日誌の著者による取消線）。これが通過するころ二度目の空襲警報も解除となつた。その頃敵は何

れも南方洋上に脱出したとのことだが、軍では、けふ初めて艦載機の侵入を見たので、この後B二十九と連合して来襲することもあり得るから注意するやうとの事だつたが、我々もまた一所懸命であり、勿論、鉄壁の防空陣に緩みなどあるべき筈はない。間もなく警戒警報も解除され待機の姿勢を解いた。

来襲延一千機 撃墜百七十四機 撃破五十機以上（行動は関東及静岡県）

(95) 午後二時半を少し過ぎた頃、又々警戒警報のサイレンだ。執拗な敵めがまたうせたと見へる。直ちに待機の姿勢に入る。

情報によると、今度は入れ代つてマリアナからB二十九が大挙してやつて来たらしい。それも十機宛程度の編隊で次々に御前岬めざしてやつて来た。こやつら幾手にも分れ、二時五十分頃、浜松附近に四十機、豊橋附近に三十機、渥美半島西方に三十機がそれぞれ旋回中と報ぜられ、間もなく東の山の上を南から北に向つて進む敵の二編隊が微かに見へる。別に小形機十数機知多半島を北西に進んだが、途中方向をかへ東をさしてやつてきた。遙かに西方から爆音が聞へ、それが追々に近づいてくると思ふと急に聞えなくなつて仕舞つた。大方南方へでもそれたのだらう。

かくてわざわざ大挙して来ながら、我が制空陣に恐れてか大した行動もせず、主力の六十機先づ洋上に脱去したので、三時半空襲警報が解除された。東方多米峠を望むと黒煙が濛々とたち上つて居る。また浜松がやられて居るらしい。かくて四時十分、警戒警報も解除され平常に帰つた。

B二十九にあらず、やはり艦載機であつたそう
だ。戦果は(94)と共に記す

午後五時半早目に夕食を為し箸を置くか置かないかのうちに又々警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報によると浜名湖附近に侵入した敵一機がその上空を旋回中で或は西進するかに見へたが、間もなく南方に去つたとて、僅々十分間許りでこの警報は解除になつた。

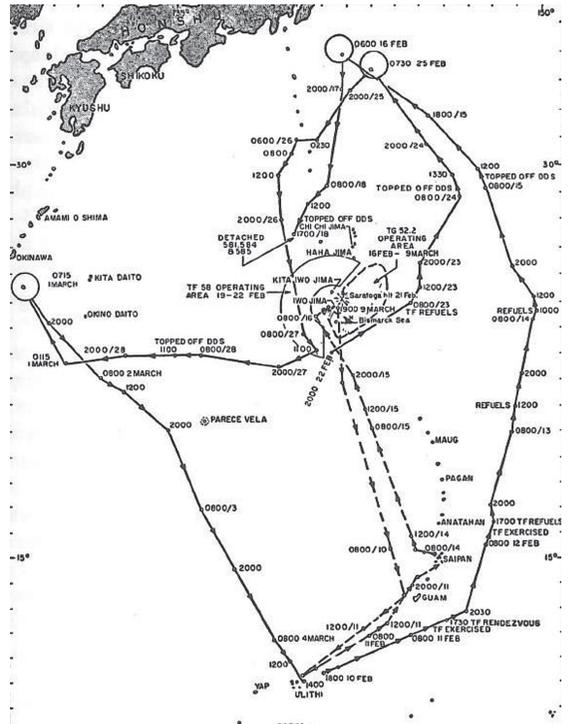
侵入一機 為す所なく脱去

[解説] 本誌第6巻1号でも述べたように、米軍は硫黄島に対する総攻撃を2月19日に開始、同島をほぼ1カ月かけて制圧することになる。これに先立って、第5艦隊第58機動部隊は、それぞれが空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦からなる5つの任務群(58.1~58.5)に分かれて、2月10日から太平洋上において牽制活動を展開するとともに、第36図にあるように、16日06時00分には関東地方に最も接近した。こうして16日と翌17日には日本軍の航空機を破壊し対空砲火を減ずることを目的に、東京および周辺飛行場等の施設に対する一連の艦載機攻撃を行った⁸⁾。

第36図の実線——は、第58機動部隊高速空母の航跡と作戦地域、破線-----は、第52.2任務群護衛空母の航跡と作戦地域を示す。航行図の○で囲んである地点は、北から順に2月16日06時00分、2月25日07時30分、3月1日07時15分の位置である。第58起動部隊高速空母は16日と17日に関東地方への艦載機攻撃のあと、硫黄島総攻撃に参加し、2月25日に日本に再接近して関東地域に艦載機攻撃を加えた。その後、南下し硫黄島を経て沖縄に向かい、3月1日に那覇を爆撃した⁹⁾。

第58起動部隊の各任務隊のうち第22表の通り

である。2月16日と17日の艦載機攻撃では、関東地域を大きく4分割して58.1任務群が南西部、



第36図：1945年2月10日～3月10日の第58機動部隊の航行図

(出所)『海軍作戦史 第14巻』23頁。

第22表：第58機動部隊の編成(1945年2月)

	TG58.1	TG58.2	TG58.3	TG58.4	TG58.5
空母 (CV)	ホーネット, ワズプ, ベニンソン	レキシントン, ハンコック	エセックス, バンカーヒル	ヨークタウン, ランドルフ	エンタープライズ, サラトガ
軽空母 (CVL)	ベルウッド	サンジャシント	コウペンス	ラングレー カボット	
戦艦 (BB)	マサチューセッツ, インディアナ	ウィスコンシン, ミズーリ	サウスダコタ, ニュージャージー	ワシントン, ノースカロライナ	
大型巡洋艦 (CB)			アラスカ		
重巡洋艦 (CA)		サンフランシスコ, ボストン	インディアナポリス		ボルチモア
軽巡洋艦 (CL)	マイアミ, サンジュアン		パサデナ, ウィルクスバレー, アストリア	サンタフェ, ビロクシー, サンディエゴ	フロント
駆逐艦 (DD)	15隻	19隻	14隻	17隻	12隻

(出所)『海軍作戦史 第14巻』21頁。

8) この作戦の全体像や攻撃方法については工藤洋三 (2016)「米艦載機による1945年2月の関東地方への空襲」『空襲通信』第18号 (3~17頁) に詳しい。本稿の記述も同稿に負うところが多い。

9) S. E. Morison (1960), Victory in the Pacific 1945, History of United States Naval Operations in World War II, Vol.14, Univ. of Illinois Press. 以下では『海軍作戦史 第14巻』と記す。

第23表：2月16日・17日の豊橋飛行場を目的とした艦載機空襲

	作戦内容	時刻		出撃機				
		発艦	着艦	機種	戦隊	発艦機数	攻撃機数	母艦
16日	戦闘機掃討：浜松，豊橋，老津の飛行場	07：58	11：40	F6F-5	VF-17	12	12	ホーネット
				F6F-5	VBF-17	4	4	
				F6F-5		16		ベニントン
17日	豊橋飛行場の設備と航空機の破壊	06：50	11：13	TBM-3	VT-17	10	10	ホーネット
				TBM-IC	VT-17	2	2	
	防衛と攻撃：横須賀飛行場	06：52	11：10	F6F-5	VF-17	4	3	ホーネット
				F6F-5	VF-17	4	4	
				F6F-5	VBF-17	4	4	
豊橋飛行場の施設の攻撃	07：15	11：30	SB2C-3	VB-17	12	12	ホーネット	

(出所) 工藤洋三 (2016) より作成。

58.2任務群が南東部，58.3任務群が北西部，そして58.4任務群が北東部を担当した。両日にわたって浜松飛行場，豊橋飛行場等を攻撃したのは，58.1任務群に所属する空母ホーネット，ワズプ，ベニントン等から出撃した戦闘機，戦闘爆撃機，雷撃機などであった¹⁰⁾。

日誌によれば，16日は，まず機動部隊の艦載機の関東地方への来襲に対して07時58分に警戒警報が発令されたものの20分で解除となった。その後，豊橋地方にも「午前九時，警戒警報に続いて空襲警報が発令され，「敵三機が我が上空に現れ旋回して東北に去り，「暫くすると，また三機がやつて来て上空を通り西の方で旋回してこれも東北に去つた」。「十時頃，更に六機が上空にやつて来て旋回」すると，「高射砲がなる。機関砲が響いてくる。壕にゐても気が気ではない」状態となったが，「十時十分，空襲警報が解除になつた」。しかし，「五分とたたない内にまたしても空襲警報」が発令された。これは浜名湖附近から北進する敵の一編隊」に対するものであった。しばらくして，空襲警報，警戒警報とも解除となった。

米軍資料によれば，第58起動部隊第58.1任務群は，浜松，豊橋を西南端とする南関東一帯の飛行場を目標に，16日05時45分から17時15分ま

で22の作戦を展開，ホーネット，ワズプ，ベニントンなどの航空母艦から延べ約440機の艦載機が出撃した。第23表は，工藤洋三 (2016) をもとに2月16日と17日に豊橋飛行場を目標あるいは実際に攻撃した作戦と艦載機の機種，機数などをまとめたものである¹¹⁾。このうち，16日はホーネットの第17戦闘機隊 (VF-17) からグラマン・ヘルキャット (F6F-5，戦闘機) 12機，同じく第17戦闘爆撃機隊 (VBF-17) から4機が発艦，ベニントンからは16機が発艦して，浜松，豊橋，老津の飛行場を対象とした戦闘機掃討を行った。

日誌によれば，「午後二時半を少し過ぎた頃，又々警戒警報のサイレン」が鳴った。「二時五十分頃，浜松附近に四十機，豊橋附近に三十機，渥美半島西方に三十機がそれぞれ旋回中と報ぜられ，間もなく東の山の上を南から北に向つて進む敵の二編隊が微かに見」えるなどしたが，やがて姿を消し，「三時半，空襲警報が解除された」。一方，「東方多米峠を望むと黒煙が濛々とたち上つて居」り。「また浜松がやられて居るらし」かった。こうして警戒警報も16時10分に解除となった。なお日誌の著者は，この敵機の来襲を最初はB-29と勘違いしたようであるが，のちに艦載機であったと訂正してい

10) 前掲，工藤洋三 (2016)，7頁参照。

11) 国会図書館デジタルコレクションの日本占領関係資料で，「toyohashi」で検索すると，これらの Air Action Report (「艦載機戦闘報告書」) を閲覧することができる。

第24表：2月16日・17日の気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時刻 (K時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K時)	目標 (地域)
2月16日	3PRM50	(160357K)*	[160257]	{160957}	S161757K	呉
	73PRM7	(160429K)*	[160329]	{161029}	S161829K	東京
	WSM205	161450K	161350	162035	S170352K	東京
	WSM206	161643K	161543	162243	S170551K	東京
2月17日	WSM207	-	-	-	-	東京
	3PRM51	170448K	170348	171048	S171908K	名古屋
	3PRM52	170454K	170354	171054	G171940K	神戸・大阪
	WSM208	(171347K)*	[171247]	{171947}	S180347K	東京
	WSM209	171632K	171532	172232	S180633K	東京

注：*は出撃時刻の記載がないこと、-は出撃中止または早期帰還を示す。

()内の時間は帰還時刻から逆算(14時間マイナス)した推定の出撃時刻(K時)。

[]内の時間は推定出撃時刻(K時)を日本時間に換算(1時間マイナス)。

{ }内は[]内の時刻に日本までの平均的飛行時間(7時間)をプラスした時刻。以下、同様。

(出所)「作戦要約」より作成。

る。

この14時30分過ぎの警報発令と敵機の来襲は、浜松飛行場とその設備および施設の攻撃などを目的に行われた5つの作戦によるものであった。ホーネット、ベニントン、ワズプ各空母からヘルキャット、アベンジャー(TBM, 雷撃機)、ヘルダイバー(SB2C, 爆撃機)、コルセア(F4U, 戦闘機)など78機が12時45分から同59分までにそれぞれの航空母艦を出撃した。日誌では17時30分に警戒警報が発令されて間もなく解除となるが、これら艦載機の一部に対するものであろう。この日の第58機動隊による浜松・豊橋への攻撃の主力は、浜松飛行場へ向けられたこともあり、豊橋飛行場および豊橋市内に空襲被害はなかったとされている¹²⁾。

2月16日のマリアナ地域からの気象観測爆撃機及び写真偵察機の日本への出撃時刻、日本到着予想時刻等は、第24表の通りである。また、3PRM50(呉)、73PRM7(東京)、WSM205～206(いずれも東京)については飛行コースの

関係からか警報の対象にならなかったようである¹³⁾。いずれにしても偵察機については、艦載機攻撃と時間的に重なっているため、警報が改めて発令されることはなかったと思われる。

二月十七日(土)

これまで敵の我が本土空襲はマリアナを基地とするB二十九で、それも整備其他の関係から四日乃至五六日目に来襲するに過ぎなかつたが、最近この方面の基地を著しく増大し、現在三百機からがこの方面へ進出して来て居るといふ。これなら五十機や六十機でなら毎日でも来襲は可能だ。こやつらまだまだ本土をねらつてゐるに相違ないから、今日も昨日同様、艦載機による波状攻撃と並行して、B二十九による攻撃をも予測せねばならぬ状態にあるのだといふ。

皇軍の善戦敢闘は、何れこれらの敵を覆滅する期もあらう。神風隊による敵空母撃沈といふ如き快報もやがては齎されよう。その楽しみを胸に抱いてその日の来るまで、国民は鉄壁の防空陣に尊いこの本土

12) 近藤正典(1977)159頁。なお、本書の艦載機来襲とその動向についての記述は、本日誌との類似性が強い。

13) 『朝日新聞』(1945年2月17日付)は、B-29一機が「十六日午前二時ごろ神戸附近に来襲、若干の投弾をした」と報じているが、これについては不明。原田良次(1973)『日本大空襲』上、中公新書は、「二三〇B29一機来襲」(173頁)と記すのみである。これはWSM206であろう。

を守りぬかねばならぬ。さあくるなら来いだ。

午前六時記。

向山町では、昨日重傷者がまた一人死んで合せて犠牲者が九人となった。この中には風呂水を吸んでみた子供の三間許りの処へ落ちて即死したのや、三年生の子供たちが鬼祭りを見に出かけての途中やられたのもあり、またある婦人は最近疎開して来て、子供を負ふて防衛当番に当たつてゐた処をやられたともいふ。敵来襲に當つて、子供を負ふて婦人が看視に当るなんて、やるものも、やらせるものも考へ直す必要があらう。また近くの松井清君、徴用で名古屋の軍需工場に勤務中、やはり爆撃にあつて殉職したと昨日報せがあつた。至つて真面目な人物だつたが、五つを上三人の子供があり気毒な話だ。尚、爆撃直後近くの工兵隊が出動して、地方人が震へ上つてゐる中を死体の処理や負傷者の手当其他に活躍してくれた。そして一般から非常に感謝されて居るといふ。心強い話だ。(翌日また一人死んで合せて十人となった)

(97) 敵は朝からやつて来て、朝食頃には横鎮中管区に警戒警報が発令されて居るといふ。そのうちにはこちらへもやつてくるだらう。もうこうなれば空襲即我々の生活だ。来るならいつでも来いと待ちうける。けふは珍らしく晴れ渡つた空で、少し風はあるが余り寒くないのが何よりだ。午前八時になると静岡県下に空襲警報が発令された。伊豆半島方面から西進する敵編隊に備へるためだ。八時半、こやつらは南方に脱去したといふが、戦雲ただならぬものがあり、満を持して待機する処、嵐のまへの静けさを思はせる。

そのころ御前岬附近に敵艦載機十機、伊豆南端に第二の敵大編隊、更に少し距れて第三の敵編隊が西進中だとして、八時四十五分、警戒警報に続いて空襲警報が発令された。九時になると此等の敵は浜松及その以東各地に侵入したといふ。九時五分、西の方で高射砲が鳴る。大方修正射であらう。

そのころ艦載機六十機が御前崎附近を西進し、別の四十機が浜松市の上空を旋回中だといふ。九時二十五分、こやつらだらう、東南から我が郷土の真

上をさしてやつて来た。待避の合図があちこちで鳴る。壕にもぐつてゐると高射砲が鳴る。上と下で機関銃を打ち合う。中にゐても気が気でない。

この緊張は暫く続いたが、漸く静かになつたので飛び出して屋内をたち検する。幸に異常がない。こやつ九時三十分頃、浜松市の附近から南方洋上に脱去したとのことだ。これより先き、九時十五分頃、房総半島方面から約九十機が北進、こちらへくるものと予想されたが、拾時四十分頃、方向をかへ東方海上へ脱去し、外に富士山附近を西進する敵三十六機があるといふ。そのうちに西南からまた爆音が聞え頭上に迫る一編隊がある。八釜^{やかま}しく待避の合図がなるのでまた壕にもぐる。こやつら頭の上を通つて東にいつたらしい。九時五十分、敵機は大方退散したと見へ、空襲警報が解除になりやれやれと思ふと、十時二十五分またまた空襲警報だ。今度も敵編隊が御前崎附近から侵入したらしい。十時三十分、敵四機浜松侵入を報ぜられ、そのうちに岩屋山の方から爆音が聞へて来た。こやつは南方を西に向つて進んでいくらしい。昨日もさうだつたが、けふも敵め我が飛行場をねらひ、先程の来襲も大崎飛行場がめあてだつたらしい。それにけふは高度の関係かこの晴天に敵機の影が少しも見へず、ただ爆音ばかりを目的なのが聊か心許ない。十時五十分、B二十九が浜松附近を西進中との情報に北方を見ると、来た来た例の高高度で名古屋をめざして居る。けふは天気の良い工合か雲を曳いてはゐない。

十一時二十五分、真上に爆音が聞へ頭上に迫つてくるらしい気配にまた待避する。今の先き名古屋へ行つた奴らしい。そのうちに何れへか行つて仕舞つた。少しまがあるやうなので早目に昼食すると、その途中又もや爆音が頭上に迫るらしい。待避の合図がそここで鳴り出したので茶碗をもつまま壕に入る。壕の中での食事はけふが初めてだ。やつと喰べ終つたとたん空襲警報は解除。これならそんなにしなくてもよかつた訳だ。この敵はまもなく浜松附近から洋上に脱去したさうだ。こうして十二時=〇時二十分、警戒警報も解除されこの来襲も一段落を告げたことであつた。

来襲延六百機 撃墜百一機 撃破二十八機 (関東及静岡県に行動)

第25表：2月17日の艦載機による豊橋飛行場への攻撃内容

機種	標的	攻撃機数・戦隊	命中弾	備考
F6F-5	格納庫 (hangar) A	4機・VF-17	5"ロケット弾×12 500#GP × 1	破壊
		1機・VBF-17	1000#GP × 1	
	格納庫 B	2機・VF-17	5"ロケット弾×12	破壊
		2機・VFB-17	1000#GP × 1	
	格納庫裏の小建造物	1機・VBF-17	1000#GP × 1	
格納庫 C	1機・VBF-17	1000#GP × 1	破壊	
SB2C-3	飛行場北東の格納庫・整備工場	12機・VB-17	1000#GP × 11, 250#GP × 21, 20mm × 390	格納庫3棟破壊, その他に損害
	駐機中の飛行機	1機・VB-17	20mm × 12	僅少な損害
TBM-3/	飛行場北東の建物	6機・VT-17	2000#GP × 6	深刻な損害
TBM-1C	飛行場と駐機中の飛行機	2機・VT-17	2000#GP × 2	双発機3機に損害

(出所) Aircraft Action Report No.3,4,9, Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945より作成。以下、「艦載機戦闘報告書」と記す。

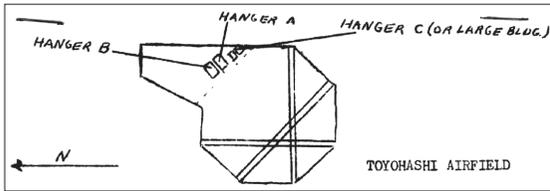
[解説] 2月17日の日誌は、軍情報であろうか、マリアナ基地におけるB-29の増強によりその数も300機を超え、「艦載機による波状攻撃と並行して、B二十九による攻撃をも予測せねばならぬ状態」に対する危惧で始まっている。つづいて、昨日の向山町の空襲による死亡者が2人増えて10人になったこと、被曝やその後の様子などが語られている。

17日は、08時に静岡県に空襲警報が発令された。その約30分後、「御前岬附近に敵艦載機十機、伊豆南端に第二の敵大編隊、更に少し距れて第三の敵編隊が西進中だとして、八時四十五分、警戒警報に続いて空襲警報が発令された」。次に「そのころ艦載機六十機が御前崎附近を西進し、別の四十機が浜松市の上空を旋回」、「九時二十五分、こやつらだらう、東南から我が郷土の真上をさしてやつて来た」。退避の合図を受けて「壕にもぐつてみると高射砲が鳴る。上と下で機関銃を打ち合う」のが聞こえた。

さらに、「空襲警報が解除になりやれやれと思ふと十時二十五分、またまた空襲警報」が鳴った。「敵編隊が御前崎附近から侵入した」らしく、「十時三十分、敵四機浜松侵入を報ぜられ、そのうちに岩屋山の方から爆音が聞えて来た」。日誌は、これらの敵機も、「先程の来襲も大崎飛行場がめあてだつたらしい」と述べて

いる。極めて緊迫した状況に置かれていたことがわかる。「十一時二十五分、真上に爆音が聞へ頭上に迫ってくるらしい気配にまた待避する」などしたが、12時20分ようやく警報が解除となった。

米軍資料によれば、17日には第58.1任務群は13の作戦を展開した。そのうち豊橋飛行場を攻撃目標とした作戦は、第25表に示すように空母ホーネットからの第17雷撃戦隊アベンジャー(TBM-3/1C)と同第17爆撃戦隊ヘルダイバー(SB2C-3)による2作戦のみであった。ところが、横須賀飛行場を攻撃対象とするホーネットの第17戦闘隊および第17戦闘爆撃戦隊ヘルキャット(F6F-5)12機の部隊は、横須賀飛行場に向ったものの、同地域が雲に覆われていて視界が悪かったため、攻撃目標を豊橋飛行場に変更した。この部隊が目標上空に到達したのは0940K(日本時間08時40分)であった。第37図は、海軍航空基地の滑走路と格納庫等の配置図である。出撃した12機のうち11機が第25表に示すように格納庫A・B・Cなどにロケット弾を発射するとともに、一般目的弾を投下した。格納庫AとBには、それぞれ12発ずつのロケット弾が打ち込まれている。次に、爆撃戦隊が豊橋飛行場を攻撃したのは1000K(日本時間09時00分)である。12機が格納庫などに1000ポンド



第37図：豊橋海軍航空基地（豊橋飛行場）の配置図

注：HANGERは、HANGAR（格納庫）の誤字。
（出所）「艦載機戦闘報告書」より。

一般目的弾11発、250ポンド一般目的弾21発を投下、機銃掃射を行った。さらに、雷撃戦隊が豊橋飛行場上空に現れたのは約1時間後の1030K（日本時間9時30分）であった。出撃機12機のうち8機が格納庫（飛行場北東の建物）などに2000ポンド一般目的弾8発を投下した。米軍資料から推測する限り、格納庫をはじめとする建物群は少なからぬ損害を被った印象がある。

日誌の記述と米軍資料とを照らし合わせながら当日の流れをみると次のようになりそう。日誌の08時45分の空襲警報の際には、すでに豊橋飛行場への第1波の艦載機爆撃がはじまり、09時00分から第2波の攻撃がはじまろうとしていた。しかし、日誌はこれらの爆撃についてはとくにふれていない。日誌の記述が切迫した状況を伝えるのは、09時25分の空襲警報以降で、爆発音や機銃掃射の音を聞き、それが大崎飛行場（豊橋飛行場）への攻撃であるらしいと記している。これらの記述のベースとなっているのはラジオの軍情報であろうか。なお、日誌にある10時25分の空襲警報は、同日展開された浜松および三方原飛行場への2つの作戦に出撃した艦載機に対するものと思われる。

海軍航空基地があった大崎島の変遷史である近藤正典（1977）『大崎島』（大島島変遷史編纂

員会）は、日誌と同様、08時40分および09時00分の攻撃にはふれずに、艦載機が「九時二十五分頃南東部から豊橋上空に侵入した。主力は豊川海軍工廠をねらい、一部は大崎の海軍航空基地をねらった」。そのうちの3機が爆弾を投下、その結果、同基地の号令台・整備所が破壊され、8人の死者（兵・士官のみ）を出した。そして「基地の被害は大きいものではなかった」（160頁）としている。ただし、このような記述が、どのような資料や根拠に基づいているのかは不明である。

名古屋空襲を記録する会（1985）は、被害地域として大崎海軍航空隊、老津飛行場の他に大清水町、高豊村、前芝村、蒲郡町、西浦町、塩津町、杉山町、田原町をあげている。軍事施設については「若干ノ被害アル模様」、軍事施設以外ハ機銃掃射ノミ・・・高豊村ニ於イテハ農業倉庫全焼シ集荷中ノ物資消失セリ」（16頁）と記している。

こうした艦載機攻撃のなかでも、マリアナからの気象観測爆撃機や写真偵察機が日本本土へ来襲していた（第24表参照）。3PRM51（名古屋）～3PRM52（神戸・大阪）、WSM208～209（いずれも東京）の4機である。それぞれの日本本土到着予想時間は、PRM51は10時48分、PRM52が10時54分、WSM208が19時47分、WSM209が22時32分である¹⁴⁾。日誌によると、豊橋飛行場への艦載機攻撃が終了してしばらくして「十時五十分B二十九が浜松附近を西進中との情報に北方を見ると来た来た例の高高度で名古屋をめざして居る」とある。これはPRM51と考えられる。前掲、第34図の2月15日の浜松駅周辺の空襲後写真はこの時に撮影されたものである¹⁵⁾。なお、夜の2機、WSM208とWSM209は豊橋地域の警報の対象にはならなかったよう¹⁶⁾。

14) 『朝日新聞』（1945年2月19日付）は「B29各一機は十七日午後八時半過ぎ帝都附近、同十一時半過ぎ帝都へ」と報じている。

15) 3PRM51は、この日、浜松飛行場の航空写真を撮影し、損害評価を行っている。

16) 『朝日新聞』（1945年2月19日付）は、「B29一機は十七日午後八時半過ぎ帝都附近、同十一時半過ぎ帝都へ」と報じている。

第26表：2月18日～20日の気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時刻 (K時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K時)	目標 (地域)
2月18日 (月)	WSM210	172010K	171910	180210	S180922K	東京
	WSM211	*	—	—	S190000K	大阪
	WSM212	181711K	181611	182311	S190620K	大阪
2月19日 (火)	WSM213	182003K	181903	190203	S190900K	大阪軍工廠
	3PRM53	(190240K)*	[190140]	{190840}	S191640K	各務ヶ原飛行場
	WSM214	(190535K)*	[190435]	{191135}	S191935K	沖縄
	WSM215	(191115K)*	[191015]	{191735}	S200115K	九州
2月20日 (水)	WSM216	192041K	191941	200241	S200956K	神戸
	WSM217	(200528K)*	[200428]	{201128}	S201928K	沖縄
	WSM218	(201353K)*	[201253]	{201953}	S210353K	大阪軍工廠
	73PRM8	*	—	—	S210555K	東京

(出所)「作戦要約」より作成。

二月十八日 (日)

(98) ゆふべから今日へかけて丸一日敵機の来襲もなく、お蔭で連日の疲れを癒すことが出来た。尤も関東や阪神へは昨夜三度もやつて来たといふことから、そろそろ今夜あたり来るだらうと心構へしてみると、八時半頃、軍情報として紀伊水道から敵機侵入が報ぜられた。敵は阪神をめざしてゐるらしいが、それからよく鈴鹿ごえでやつてくるので待機してると、八時四十五分、警戒警報が発せられ遠く近くサイレンが鳴り出した。すぐ外に出て合図の太鼓をうつ。六日の月が西天に懸り淡く下界を照して居る。風もなく寒さもずつと緩んだ戸外に立つて次々の情報を聞いて居ると、敵は奈良附近まで来て暫く旋回を続けてみたが、そのまま南方へ脱去したとて三十分許りで警報は解除された。敵め、きのふおとついの大損害にすつかり震へ込んだものと見へる。

侵入一機 近畿地区を旋回して脱去

[解説] 日誌によれば、17日夜から18日にかけて警報は発令されなかった。20時30分に軍情報として紀伊水道から大阪方面へのB-29の侵入が伝えられると、同時45分に警戒警報が発令され、約30分で解除となった。米軍資料によれば、この日、日本に来襲するはずの米軍機は、

第26表にあるように3機あったが、大阪方面へ向かったのは2機であった。WSM212 (大阪) は時間的に合わないが、WSM211 (大阪) はレーダーや爆弾倉の扉の故障などで飛行は途中で中止されたものの、大阪周辺まで到達した可能性がある。日誌の警戒警報は、このWSM211を対象に発令されたものと考えられる¹⁷⁾。なお、WSM210 (東京) は、機械の故障のために目標に到達することができず、最終目標としての浜松に500ポンド一般目的弾12発を投下したとされているが、浜松側の空襲記録には目下のところ該当するものがない¹⁸⁾。

二月十九日 (月)

(99) 春を思はせるやうに朗らかな朝だった。西の方にこそ雲があるが、この当り晴れ渡り稀に白雲が浮んで居る。こんな時こそと、西の畑に待避壕を新たに掘りかけた。まだ一尺と掘らぬ九時十分、突如警戒警報が鳴り出したので、スコップを^{ほち}撥にもちかへ、すぐ合図を打つて組内へ知らせる。敵はB二十九、一機で浜名湖附近から侵入し、所どころで旋回しつつ西北さして進んでゆく。まもなく爆音が北の方から聞えて来た。いつ針路をまげ、この上にくるかも知れないので待避の合図を打つたが、程な

17) 『朝日新聞』(1945年2月20日付)は、「十八日午後九時頃、十九日午前零時頃および同三時頃の三回に互り阪神地区に来襲大阪に若干の爆弾を投下した」としている。それぞれ WSM211, WSM212, WSM213 (大阪) と考えられる。

18) 『朝日新聞』(1945年2月19日付)も、B-29一機が「十八日午前二時半過ぎ浜松附近に来襲・・・若干の爆弾を投下した」と報じた。これが WSM210であろう。

く爆音は空のあなたに消えていった。
名古屋へ向つた敵は、名古屋に侵入することなく北方を通つて岐阜までいったが、そこで反転し東して飯田附近に進み、静岡県に入つたので警報は解除になつた。この敵機は後、静岡の北方を御前崎に出、南方洋上に脱去したといふ。何処にも投弾した模様はないさうだ。

侵入一機 東海道地区偵察脱去

(100) 午後二時に十分前、志摩半島の南方を数編隊で襲来する敵機ありとの情報に直ちに待機に入る。十三日に六十機で名古屋へうせてから丁度六日目、獣め性懲りもなくまたうせたのだ。敵いよいよ近く、続いて空襲警報の発令となつた。こやつら志摩半島通過の情報と殆んど同時に西南の空から爆音が聞へてくる。B二十九に相違ないが、何分空一面の雲りで姿を見ることが出来ぬ。爆音は次第に迫ってくるので壕にもぐつて待機すると、頭上や西よりを通つて何れも名古屋方面をめざしてゆく。一波、二波、三波、殆んど連続だ。三分か五分間を置いてまた爆音高く西進する敵編隊がある。再び壕にもぐつて待機すると腹にこたへるやうな爆音だ。それにいつ爆弾が落ちてくるか分らぬ。落ちたが最後と思ふと余りよい気持ちでもないが、恐ろしいといふ気持ちは全く出て来ない。不思議なものだ。こやつらけふは帝都をめざして来たらしく、名古屋を襲ふと見せかけ何れもが途中から転じて東北に向つてゆく。これは我が方を欺く手であると共に上層気流を利用するため、敵はしばしばこの手でやってくる。二時半、浜松及岡崎附近にみた奴が東北に向をかへ、また静岡市にも侵入したといふ。二時五十分、沼津附近の四機、静岡附近の九機、浜松附近の九機何れもが東部管内に向つてゐる。三時、志摩半島沖合にまた敵編隊が現れた。こやつら知多半島から侵入して東北に向つてゆく。どこか遠くで高射砲らしい音が聞へたと思ふと、また西から爆音が聞へて来た。仕方なく三度壕にもぐると、これも我が上空を通つて東北に去つた。こやつどこかへ投弾したのか遠くの方から炸裂音らしいのが響いて来た(日誌の著者による頭注――宮大木へ投弾したのだ

さうな。それも十余発一所に落したようだ)。三時十分頃、敵最後の編隊も東北に去り、これで管内に敵機なく静かになつたので、三時半、空襲警報が十分遅れて警戒警報も解除になつた。何分今度は空一面の雲りで全然敵機も見られず、爆音が頼りなので、友軍機の通過に待避信号をうつ慌てものもあるといふ始末も止を得ないナンセンスの一つだつた。

来襲百機 撃墜二十一機 撃破三十機 主として帝都及其周辺に行動

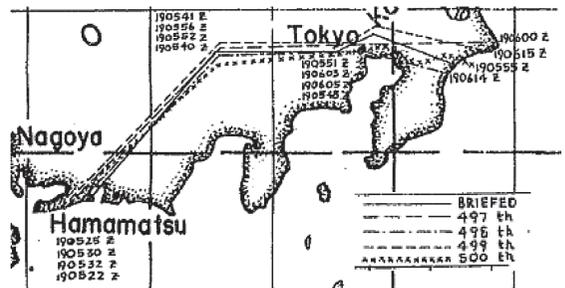
空襲正に壱百回

昨年十一月二十三日、最初の空襲警報が発令されてから日数八十九日でとうとう壱百回となつたが、思へば敵もよく来たものだ。この間には夜間こそそそときて、弾も落さず帰つたこともあれば、白昼堂々編隊で来て暴爆を敢てしたこともあり、最近のやうに艦載機による延千機といふやうな来襲もあつた。然し敵にとつては、我が豊橋など余り重要ではないと見へ、度々上空を通過はするが爆撃を受けたのは十二月九日に飽海と磯辺、本月十五日、向山がやられただけで、これを他の都市に較べたら被害などいふも恥しい程度だ。この間、十二月七日と一月十三日両度、地方としては類の少い程の強震があり、倒壊家屋数十戸、死者三十人といふ騒ぎがあり、余震が暫く続いて、一時は空襲と地震と上下から挟み打ちに遭つたこともあつたが、地震の方はもう治まつて、大方人々の念頭から去り、その代りに空襲の方が一段と激化されて来た。そんな訳で初めお義理に作つた待避壕だけに、近頃になつて不完全さを痛感し、そここで掘り直したり作り替するやうになつた。それに当局から重要家財は疎開するか地窖ちこうを設けて収容するやうとお達し。宅ではどうかこうかの待避壕はあるが、余りに狭いし地窖も非常に小さいので、空襲一百回の記念に西の畑へけふから改めて壕を掘りかけた。完成は無力な老人のこととて前途遠遠だが、竣工の上は現在の待避壕に家財を収容し、ゆつたりとした壕に作り上げやうと思つてゐる。空襲激化のけふこのごろ、お互に明日のことは分らぬが命ある限り暇日を見ては作るべく心がけて居る。それも戦ふ国民の努めだと思へばこそだ。 二、一九夜記

[解説] 2月19日は09時10分の警戒警報からはじまった。この警報は各務ヶ原飛行場を目標に飛来したPRM53と考えられる(第26表参照)。WSM213(大阪), WSM214(沖縄)に対して警報は発令されなかったようである。午後13時50分に再び警報が発令されるが, それは中島飛行機武蔵製作所を攻撃目標とした大規模爆撃によるものであった。18日, サイパンの第73航空団99機, テニアン第313航空団51機の合計150機が182042Z~182212Z(日本時間19日05時42分~19日07時12分)に出撃した。同部隊は, 第1目標を中島飛行機武蔵製作所, 第2目標, 東京市街地および港湾地域とした。この計画は, 海軍機動部隊の硫黄島攻撃と調整されたものであった。それゆえ, 2つの目的, すなわち, 一つは, 日本の戦闘機を日本の基地にとどめるための陽動作戦, もう一つは, 高い優先順位をもつ目標を攻撃するという目的をもっていた。武蔵製作所は, 日本の戦闘機用エンジンの40%を生産していたが, 生産能力をさらに拡大しつつあると考えられていた。

各機は, M64とM43, 各500ポンド一般目的弾を75%, M17A1集束焼夷弾, M76焼夷弾を25%の割合で搭載して出撃した。ただ焼夷弾を搭載したのは, 第73航空団498爆撃群団の33機だけであった。指示された飛行コースは, 浜名湖周辺から上陸して甲府または富士山をIPとして目標である武蔵製作所へ向かい, 爆撃と房総半島九十九里浜から太平洋へ抜けるものであった。第73航空団の群団別の侵入地点とその後のIP, 目標, 離岸地点および各時刻は第38図の通りである。第313航空団の場合は, 侵入地点が三河湾内から御前崎付近まで大きく分散した。

第1目標上空が雲に覆われていたため, 部隊は攻撃目標を第2目標に変更することが必要となった。この結果, 119機が第2目標の東京の市街地および港湾に, 高度24,500~30,000フィートから爆弾を投下した。また, 7機が最終目標



第38図: 2月19日の第73航空団の飛行コース

(出所)「作戦任務報告書」No.37.

を, 5機が臨機目標をおもにレーダーで爆撃した。なお, 第73航空団の4機が帰還できなかった。爆撃の結果は, 不十分なものであった。この最も明白な原因は, どの目標を爆撃するのかの決定が遅れたことであり, このためにレーダーによる爆撃行程に十分な時間を取れなかったからだと報告書は指摘した。なお, この作戦において, 最終目標を爆撃した第313航空団の7機が豊橋, 新居, 舞阪, 静岡, 川崎などを爆撃したになっている。

この日は, 日誌にあるように一面の曇り空で, 次から次へと来襲するB-29の爆音は聞こえたが姿は見えなかった。15時過ぎ「どこか遠くで高射砲らしい音が聞へたと思ふとまた西から爆音が聞へて来た」。「これも我が上空を通過して東北に去つた」が, 「こやつどこかへ投弾したのか遠くの方から炸裂音らしいのが響いて来た(著者頭注—宮大木へ投弾したのださうな。それも十余発一所に落したようだ)」と, 旧一宮村大木(筆者注: 現・豊川市大木町, 豊川インターの北)への投弾の様子を伝えている。米軍資料に豊橋とあるのは, この投弾をさしているであろう¹⁹⁾。

日誌の著者による計算によれば, この日のB-29の来襲で1944年11月23日から数えて100回目の警報発令となった。興味深いのは, 「待避壕はあるが余りに狭いし地窖も非常に小さいの

19) 名古屋空襲を記録する会(1985)は, 被災地域を宝飯郡一宮村地内とし, 「県下侵入八帝都ニ対スル侵入途上投弾セルモノナリ」(16頁)としている。

で、空襲一百回の記念に西の畑へけふから改めて壕を掘りかけた」、「竣工の上は現在の待避壕に家財を取容し、ゆつたりとした壕に作り上げやうと思つてゐる」と述べていることである。

二月二十一日（水）

(101) 昨日一日吹き捲つた北風は夜に入つても衰へず、為に気温は頓に降り真冬の逆戻りを思はせる。一昨日午后来襲してから敵が一向に姿を見せない。今夜あたりまた起されるものと覚悟して寝た所大空に警戒警報が鳴り出した。そらこそと起きいでて待機はしたが余り寒いので合図を打つのは遠慮した。情報によると敵は一機で、浜名湖附近から侵入、西進中の模様だといふ。果して間もなく岩屋山の方から爆音が近づいてくる。警防団のうち待避の合図に婆さんと壕にもぐる。敵は我が上空を通つて本宮山の方へ飛び去つた。幸に投弾した模様もない。何分にも寒さが身にしみるので壕から出て焚火してゐると敵は名古屋をめざすかに見へたが、足助附近で方向をかへ、南信に去つたとの情報で、五時十分前警報は解除されたが、そのまま起きて仕舞つた。何れ敵は静岡県へでも出て南方に脱去するつもりだらう。いまましいことだ。

侵入一機 東三より南信に行動

(102) 昼食の箸を措いた零時二十分、志摩半島沖合を北上する敵一機ありとて警戒警報が発令された。こやつ志摩半島までくると東北に向をかへ浜松方面に向つたが、つい接岸することなく浜名湖附近から南方に脱去したとて僅か十五分許りで警報の解除を見た。

侵入一機 接岸することなく脱去

(103) 南方洋上に脱去した前の敵は途中で旋回し、また浜名湖めざして舞い戻り、今度は浜松の上空で旋回した後、北進して飯田附近までいつたが、一方新たに志摩半島附近、渥美郡、御前崎の附近に各敵一機ありとて、一時三十分またまた警戒警報が発令された。そのサイレンの鳴つてゐる最中、爆音が南

から聞へ次いで西に廻りやがて真上に聞へて来た。敵め旋回でもしてゐるのだらう。待避信号が八釜敷鳴りだしたので暫く壕にもぐる。やがて爆音は北方に消へていつた。これらの三機は途中で一所になり名古屋を襲ふかに見へたが、その手前で向をかへ、南信に入り東して東部軍管内へ去つたので二時警報は解除になつたが、せめて作りかけの待避壕が出来上るまで来襲を遠慮して貰ひたいものだ。

侵入三機 東三より南信に行動

(104) 午後六時廿分、又々警戒警報が薄曇りの空に鳴りひびく。来襲の敵機は二機で、内一機は御前崎附近から侵入し、あちらこちらを飛び廻つた挙句伊豆半島東側から洋上に脱去し、それと時を同じくして潮岬から侵入した敵機は、田辺、和歌山方面を大きく旋回してゐたが遂に大坂に侵入、それより奈良を経て鈴鹿をこえて名古屋にやつて来た。いよいよ来るなど待機してゐると西方に当つて爆弾らしい炸裂音が響いて来た。かすかに例の爆音も聞へる。慌てものが待避の合図をうつ。ところがそれつ切り爆音は消えて仕舞つた。首を傾けてみると情報で敵は鳳来寺山附近を南進、浜名湖附近から洋上に脱去したと伝へ、七時十分になつて警戒警報の解除を見た。風もない静かな宵、朧月夜とでもいいたい風情だつた。

侵入東に一機 静岡県に行動 西に一機 近畿より本県に行動

[解説] 2月20日は、気象観測爆撃機3機が日本に来襲したが、目標が神戸、沖縄、大阪であったためか、豊橋地域では警戒警報は発令されず、静かな冬の日となった。2月21日には、朝方であろうか警戒警報が発令され、04時50分に解除となった。その後、12時20分に2度目の警戒警報となったが、これも15分ほどで解除された。さらに13時30分に3度目の警戒警報が発令され、30分後の14時00分に解除となった。この日は、18時20分に4度目の警戒警報が発令され、19時10分に解除となった²⁰⁾。

20) 豊西村警防団(1942-45)『豊西村空襲記録』は、4回の警戒警報を記録している。1回目04時04分~04時50分、2回目12時25分~12時46分、3回目12時55分~14時02分、4回目18時17分~19時13分である。

第27表：2月21日～24日の気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時刻 (K時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K時)	目標 (地域)
2月21日(水)	WSM219	(202145K)*	[202045]	{210345}	S211145K	東京港湾地域
	3PRM54	(210659K)*	[210559]	{211259}	S212059K	東京
	3PRM55	(210738K)*	[210638]	{211338}	S212138K	太田
	3PRM56	(210726K)*	[210626]	{211326}	S212126K	東京
	WSM220	210600K	210500	211200	S212000K	浜松
	WSM221	(211220K)*	[211120]	{211820}	S220220K	名古屋
2月22日(木)	WSM222	212123K	212023	220323	S221100K	九州
	73PRM9	(220130K)*	[220030]	{220730}	S221530K	神戸及び大阪
	WSM223	(220505K)*	[220405]	{221105}	S221905K	東京
2月23日(金)	WSM224	221213K	221113	221813	S230200K	呉-高知
	WSM225	222055K	221955	230255	S231150K	神戸
	3PRM57	230322K	230222	230922	S231710K	名古屋
	WSM226	230613K	230513	231213	S232043K	呉地域
2月24日(土)	WSM227	231201K	231101	231801	S240107K	神戸
	WSM228	232119K	232019	240319	S241027K	浜松
	WSM229	(241154K)*	[241054]	{241754}	S250154K	東京
	WSM230	241435K	241335	242035	S250415K	東京
	WSM231	241735K	241635	242335	S250810K	東京

(出所)「作戦要約」より作成。

米軍資料によれば、21日に日本に飛来したと予想されるB-29は、WSM219(東京)、PRM54(東京)、PRM55(太田)、PRM56(東京)、WSM220(浜松)、WSM221(名古屋)の6機であった。04時50分に解除となった警報はWSM219、12時20分の警報はWSM220、13時30分の3度目の警報はPRM54かPRM56であろう²¹⁾。さらに18時20分の警報はWSM221と考えられる。『朝日新聞』(1945年2月22日付)は「B29各一機は二十日午後八時半頃大阪附近に、二十一日午前五時帝都に来襲、投弾したが被害はなかった。またB29四機は二十一日午後一時頃関東地方に侵入偵察のち脱去した」と報じた。13時頃の三機は、東京、太田に向かったPRM54～56、それと浜松に向かったWSM220あたりであろうか。WSM220は、この日、爆弾を搭載していなかった。また『同紙』(1945年2月23日付)は「B29一機は廿一日午後七時名

古屋附近に来襲投弾した」と報じた²²⁾。これはWSM221であろう。

二月二十二日(木)

(105) ゆうべから降り出した雨は今朝になつても降りやまないで、けふは一日骨休め。近くの神明社では、今朝供進使が参向祈年祭が行はれやうとするその午前九時を少し廻つたころ、警戒警報が発令されサイレンが遠く近く雨の中に鳴り出した。

情報によれば敵は二機で、浜名湖附近から侵入し、一機は東進、一機は西進して静岡及名古屋に向ふらしいといふ。果して程なく岩屋山の方から爆音が次第に近づいてくる。打ちだした待避信号に雨中ながら暫し壕中にもぐる。敵は市の上空北よりを本宮山の方に向つてゆくらしい。程なく爆音も聞へなくなつた。

こやつ名古屋をめざしたが雲のため発見出来なかつたか足助附近から反転し、一方東進したやつも秋葉

21) 原田良次(1973)は「〇四五〇B29一機来襲。一三一五より警戒警報。B29三、四機で来襲」(182頁)としている。

22) 名古屋空襲を記録する会(1985)によれば、被災地域は「愛知郡天白村地内八事及島田」で「山林及河中ニテ被害ナシ」(16頁)としている。

山附近から浜松附近へ舞戻り、連れ立つて浜名湖附近から洋上に脱去したので僅か三十分許りで警報解除は解除になったが、何処にも投弾した模様がないから引返すかも知れない故注意するやうとの事だったが、つひそのこともなくて済んだ。

これと時を同じくして潮岬方面から侵入した敵一機は紀淡海峡を北上し、坂神を経て河内平野の上空を飛び、尾鷲附近からこれも南方洋上に脱出したとて、その地方の警報も解除された。

侵入 東海道に二機 東三・南信 近畿に一機 近畿地区 に行動

[解説] 日誌によれば、09時過ぎに警戒警報が発令された。侵入機は2機で、1機は東進して静岡へ、もう1機は西進して名古屋方面に向かうらしいと述べているが、警報は30分程度で解除となった。そして、これと時を同じくして阪神方面へ向かった1機があるとしている。『朝日新聞』（1945年2月23日付）によれば、「二十二日午前四時過ぎに・・・九州南部に来襲したが投弾はなかった」「二十二日 B29各一機が三回にわたり本土に来襲、第一次は午前九時南方より静岡地区に来襲、名古屋を経て脱去、第二次は同九時半ごろ四国方面より神戸、大阪を経て紀伊半島より脱去、第三次は午前十一時過ぎ伊豆半島より侵入、甲府、京浜地区を経て脱去、いづれも投弾なし」であった²³⁾。

日誌ではふれていない午前04時過ぎの九州への来襲は WSM222、11時過ぎの来襲は WSM223（東京）と考えられる。09時30分頃の1機は、無理をすれば73PRM9（神戸及び大阪）とも見られないこともない。09時に来襲した1機については、該当するものは米軍資料には見つからなかった。なお米軍資料によれば、この日の気象観測爆撃機はいずれも爆弾を搭載していなかった。

二月二十四日（土）

市のサイレンが鳴ること一百回目の二月十九日、物

資収容の必要から今一つ待避壕を作らうと西の畑、植込みの中へ大した意気込で掘りはじめた。何も道具がないので組のだれかれから借り集め、大小の鶴嘴、円匙（筆者注：シャベル）、唐鍬などで長さ六尺巾四尺深さを六尺とし、上の一尺を掩蓋とすると丁度中で立てるといふ計画だ。逆も自分の力では急速のことは望まれないので一日に一尺ずつ掘ることにした。それでも可なり疲れを覚へ、其間には警報が出たりして逆も半日以上続けることは出来なかつた。

それが二十日、廿一日と掘つて四尺に達し、二十二日は雨のために一日休み、二十三日の昨日、捲土重来の勢ひで更に二尺掘つて予定の六尺を掘り上げた。午後からは揚げ土の整理をやつて、晩方までに掘るだけは一応終了といふところまで漕ぎつけた。これで掩蓋の材料を工面し、出入口をつければ完全に出来上るのだが、その材料に心当りがある訳ではなし、いつのことか分らぬが、手に入らねば塀を壊してその柱を並べてもと思つて居る。なるべくならそうしたくない。といつても、いつでもよいといふ訳でなく、事は急を要するのだから気の揉めること夥しい。

こんな風で掘り上げた壕は当初の計画より余程小さくなり、上縁では長さが五尺三寸、巾が三尺四寸、地表から実際の深さは五尺六寸で底部で測つて見ると長さが四尺三寸、巾が二尺五寸しかない。然しこれだけあれば、婆さんと二人なら今迄のに較べ余裕綽々たるものだし、これで我慢するより仕方がない。それまで一時的に縁台の足を切つて仮に蓋として置いたが、どうか早く完成さしたいものだ。

二月二十四日

(106) 一昨日の午後からこの地方に敵機の襲来を見ず、どうしたものかと思ふと、他地方へは数回に亘つて来て居るのださうだ。何れ今夜あたりまたくるだらうが、今夜は明年度新組長の第一回会合があり、どうかそれだけは無事に済みたいと願つた甲斐があつて、どうやら無事に会合を終り帰宅して床について間もない午後九時、高らかに警戒警報が鳴り

23) 原田良次（1973）は、「正午 B29一機来襲」（184頁）とのみ記している。

出した。それこそ来たぞとすぐ起きいで戸外に出ると満月に近い。明皎々たる月が天に懸つてゐる。敵めこの月明りをたよりに浜名めざしてやつて来たが、来るやつも来るやつも接岸するとそこで一旋回しては、東北に向つて進んでゆく。三番目のやつが同じコースを辿ると見定めて、三十分許りでこの警報は解除になつたが、昨日から盛り返した真冬のやうな寒さにすつかり閉口した。

侵入三機 浜名湖より侵入、東部管内に向ふ

[解説] この日は先ず、警戒警報100回を記念して新たに掘り続けている待避壕について記している。「お義理に作った待避壕だけに、近頃になつて不完全さを痛感し」ていること、「当局から重要家財は疎開するか地窖を設けて収容するやうとのお達し」があったことが理由であった。組内の人たちに道具（鶴嘴、シャベルなど）を借りて、1日1尺ずつ掘進めた。計画では長さ6尺（=1間、約181.8cm）、幅4尺（121.2cm）深さ6尺とし上の1尺（約30.2cm）を掩蓋とするもので、ちょうど中で立てるほどの大きさの予定であった。しかし、最終的に上縁で長さが5尺3寸（約160.6cm）、巾が3尺4寸（約103cm）、地表から実際の深さは5尺6寸（約169.7cm）で底部で測つて見ると長さが4尺3寸（130.3cm）、巾が2尺5寸（約78.8cm）で妥協することにした。掩蓋は、塀を壊すことはなるべく避けたいので、とりあえず縁台の足を切つてこれに当てた。

日誌によれば、23日は警報のサイレンは鳴らなかつた。新しい待避壕が不十分ながらも完成した24日も21時にはじめて警戒警報の発令となった。第27表にあるように、24日に日本に到着予想のB-29は、WSM228（浜松）、WSM229～WSM231（いずれも東京）の4機あった。原田良次（1973）は、「○三四〇、一八〇五、約B29一機来襲。さらに二一五またはB29一機下谷に投弾。深夜二四〇〇ごろまたまた一機来襲」（186頁）と記している。これはこの日の米軍機の出撃にほぼ対応している。

二月二十五日（日）

(107) たまに見たのしい夢を破つてサイレンが夜の空に鳴り渡る。時は〇時五分。寒いともいつて居られず、起きて外に出ると市内四ヶ所のサイレンが次々に鳴り渡る。一つが済むとまた一つが初まる。なぜこうまちまちでなく一所に鳴らさないのかと思ふ。

サイレンは警戒警報なのに、町の警防団の半鐘は空襲警報だ。ハテナと耳を傾ると確かに一つ打つては四つづつ打つて居る。さては敵め、この月明に大編隊でもやつて来たのかと思つたが、さうでない処を見ると誰やら慌てものが間違つたものらしい。情報によると今度は一機で浜名湖めざしてやつて来たが、こやつも前のやうにそこで向をかへ、東北に進み東部管内に去つたさうで、僅か十分許りでこの警報も解除になつた。空は相変わらず晴れて月皎々。ただ何分にも寒いのがいまましい。

侵入一機 浜名湖より侵入、東部管内に去る

(108) 朝から曇り出した天候は間もなく雪となつて、降つてはとけ降つてはとけするうちにとうとう一寸も積つた。これが春の牡丹雪といふのだらう。綿をちぎつては投げるやうだ。昨日から西へ新たに掘つた壕に家財を入れて置いたが、敵いがないので朝降り出す前にとり出して措いた。

そのふりしきる午後二時十分前、あたりを震はすやうに警戒警報が鳴り出した。聞けば、浜松南方の洋上を北進する敵の数編隊があるといふので家財をまた壕に入れる。去る十九日約百機でやつて来てから丁度六日目。昨日あたりから心待ちしてゐた敵だと思へば慌てることもない。誰を見ても落付いたものだ。

二時を少し過ぎたころ、先登の敵は浜名湖附近に到達し北進中といふ。間もなく雲上から爆音を轟かせつつ上空にやつて来た。待避の鐘が鳴り出したので早速壕にもぐる。勿論下界の模様など分る筈はなく、やるとなれば盲爆だから始末が悪い。やや暫く上空を旋回してみたらしいが、やがて何れへか立ち去つた。これが最初で、次から次、爆音が消へたと思へばまた後から来て頭の上を通つてゆく。その度毎に待避の鐘がなり、爆音と待避の鐘の連続で、壕

の中にすくんで居るより仕方がない。それに通過時間が相当長いので、一編隊といつても幾つもの隊に分れて居るらしい。情報は、第一編隊から第十五編隊までの行動を刻々にしらせてくれる。それによると敵は御前崎、浜名湖、志摩半島、潮岬、室戸岬など東から西へかけ数編隊、つづいて分散侵入し東乃至東北をめざして進んでゆく。やつらのめざすは帝都及其周辺に違ひない。ここはその通路なのだ。それに前数回の夜間侵入が何れもこの附近から東進してゐるので敵め今度は帝都をねらつてゐると直観したが、果してくるやつもくるやつも東乃至東北に進んでは東部管内に侵入してゆく。三時にはもう海上に脱去しつつある編隊もあるのに、まだ後からやつてくる敵機もあるといふ始末。恐らく今日は敵も全力を挙げてやつて来たに違ひない。処が相憎のお天気で目的など達せられる筈はなく、相續いで南方洋上に脱去したり東部管内に侵入したりで、三時半、空襲警報が、三時五十分、警戒警報まで解除になつた。この間実に二時間、遠くで二三次爆弾とも高射砲ともつかぬ炸裂音を聞いたが、幸にこの附近に投弾なく経過することが出来たのは先づ先づ有難いことだ。

午前中艦載機を以て帝都に波状攻撃をなし、午後B二十九の全力を挙げて帝都及関東に攻撃を加へ来る。この際、浜松市暴爆を加えらる。来襲機数百三十機

(109) 雪はいつしか雨となつて、降りしきる午後六時、又々警戒警報が発令された。敵は一機で知多半島方面から侵入し、名古屋を経て犬山、多治見、高山などで夫と旋回して、尚も北進し富山県南部に侵入したとて、六時五十分警戒警報は解除された。どこをどう通つて敵め基地に帰ることやら、人騒がせな敵があることよ。

侵入一機 東海軍管区に行動

[解説] 2月25日は、先ず00時05分に警戒警報が発令された。これはWSM231(東京)と考えられる。この警報は10分で解除となつた。な

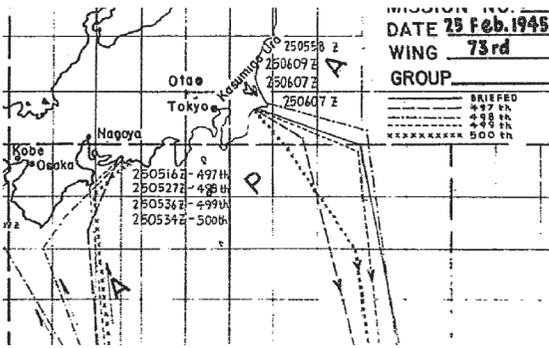
お、警戒警報は市内の4カ所にあるサイレンによるが、町の空襲警報は半鐘を鳴らすことになっているようで、誰かが空襲警報と間違えて半鐘を打つたようである。また、この日は朝から雪になり、1寸ばかり積もつた。昨日完成した待避壕に「家財を入れて置いたが蔽いがないので朝降り出す前にとり出して措いた」と記している。

午前中は平穩だつたようであるが、実はこの日には第58起動部隊は硫黄島から再び日本本土関東近海に進出して(第36回参照)、16日、17日に続いて関東地域の航空機工場や飛行場に攻撃を行った。全体で29の作戦が展開され艦載機約570機が出撃した。第58.1任務群の艦載機は、厚木、横須賀、館山方面の戦闘機掃討や飛行場への攻撃が中心であつた²⁴⁾。静岡、浜松、豊橋などは作戦の対象になつていなかったため、豊橋地方では警報が発令されなかつた。

そして、「午後二時十分前・・・警戒警報が鳴り出した。聞けば浜松南方の洋上を北進する敵の数編隊があるといふので家財をまた壕に入れる」作業を雪のなかで行つた。やがて「敵は御前崎、浜名湖、志摩半島、潮岬、室戸岬など東から西へかけ数編隊つづいて分散侵入し東乃至東北をめざして進んでゆく。やつらのめざすは帝都及其周辺に違ひない。ここはその通路なのだ」。「三時にはもう海上に脱去しつつある編隊もあるのにまだ後からやつてくる敵機もあるといふ始末」であつた。

この日の午後は、東京市街地を第1目標とする大規模爆撃が行われた。この大規模爆撃計画の当初の意図は、2月19日の爆撃では十分な成果を得られなかつた中島飛行機武蔵製作所への爆撃であつた。またこの爆撃は、2月25日の艦載機攻撃と調整されることになつていた。しかし、天気予報は本州全域が雲で覆われレーダーに相応しい目標を選定する必要に迫られ、その結果として、東京市街地が選ばれた。この作戦は、最初からレーダー航行、レーダー爆撃を想

24) 前掲、工藤洋三(2016)参照。



第39図：2月25日の第73航空団の飛行コース
(出所)「作戦任務報告書」No.38.

定して計画された。そしてこの日、グアムに新たに進出した314航空団がはじめて攻撃に参加した。こうして第73航空団114機、第313航空団93機、第314航空団22機、合計229機が、242100Zから242136Z（日本時間25日06時00分から25日06時36分）にそれぞれ、サイパン、テニアン、グアムの基地を出撃した。搭載爆弾は、第73航空団がE46、500ポンド集束焼夷弾1754発、M64、500ポンド一般目的弾114発、第313航空団がE46、1005発、M64およびM43、500ポンド一般目的弾93発、第314航空団E46、176発、M64、22発であった。各機は集束焼夷弾の他に1発ずつの一般目的弾を搭載した。M64は、焼夷弾の着弾地域をプロットする“スポッター（spotter, 目印）”として利用する予定であった。E46は、上空5000フィートで集束器具がはずれるように設定された。

3航空団の飛行コースは、まず硫黄島作戦を迂回するルートが選ばれ、西ノ島周辺を集結地点²⁵⁾、その後、北緯29度で高度を上げた。この日の上陸地点は浜名湖が選ばれた。レーダーで捉えやすいことと、日本の邀撃部隊が名古屋へ向かうのか東京に向かうのか判断するのに時間がかかることがその理由であった。その後、各部隊は甲府をIPとして目標地域へ向かい、爆

撃後は銚子周辺から太平洋上に抜け、しばらく西進して南下することになっていた。これは太平洋上の第58機動隊を避けるためであった。第73航空団114機のコースは、指示されたコースを大きく外れた部隊もあったが、浜名湖周辺から上陸して甲府、そして東京へ向かった（第39図）。目標上空は予報通り厚い雲で覆われ、やがて雪となった。B-29は、この厚い雪雲の上から0458Z～0651Z（日本時間13時58分～15時51分）に、高度23,500～31,000フィートから爆弾を投下した。第73航空団の94機が東京市街地を、同じく8機が最終目標（浜松、横浜、新宮）を爆撃、第313航空団の60機が東京市街地を、同じく18機が最終目標（横浜、清水、静岡、浜松、豊橋など）、第314航空団の18機が東京市街地に、同じく2機が最終目標（名古屋、大阪）などに投弾した。敵機の反撃はなく、対空砲火も貧弱かつ不正確であった。この結果、229機というそれまでの最大規模のB-29が出撃し、172機（75%）が第1目標である東京市街地に爆弾を投下することができた。原田良次（1973）は、悪天候のため日本の戦闘機は出撃できなかったと述べ、「各所に発した火災数は、かつてないほど多く、ついに合流火災となり約二六平方キロの地が破壊され、・・・死者六二七人を数えた」（191頁）と記している。

なお、荒井信一（2008）『空爆の歴史』（岩波新書）によれば、1944年11月29日の東京工業地帯を第一目標にした夜間爆撃、1945年1月3日の名古屋のドック地帯と市街地を第一目標にした昼間爆撃、「二つの爆撃によって、ハンセルは実験的に地域焼夷弾爆撃をテストした・・・準備はルメイに受けつがれ二月二五日には二二九機が出動し、東京市街地に対する地域爆撃を行った。この爆撃は昼間、編隊飛行で高高度から爆撃した点で、むしろハンセルの戦術を踏襲したもの」（129頁）であった²⁶⁾。

25) 米軍資料は、この時点で2機が衝突事故を起こしたと報じている。

26) ルメイに代わってから市街地を第1目標とした作戦に、1945年2月4日の神戸空襲がある。この時は69機が神戸市街地にE-28、集束焼夷弾とT4E4、集束破砕弾が投下した。2月25日の東京市街地に対する焼夷弾攻撃は、ルメイにとっては2度目のテストということになる。

第28表：2月25日～28日の気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時刻 (K 時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K 時)	目標 (地域)
2月25日(日)	WSM232	*	—	—	—	東京
	WSM233	251538K	251438	252138	S260512K	東京
2月26日(月)	WSM234	251843K	251743	260043	G260834K	東京
	WSM235	(261307)*	[261207]	[161907]	G270307K	東京
	WSM236	261435K	261335	262035	S270110K	東京
	WSM237	261738K	261638	262338	G270945K	東京
2月27日(火)	3PRM58	(270349K)*	[270249]	[270949]	G271749K	静岡—東京
	3PRM59	(270345K)*	[270245]	[270945]	G271745K	神戸—大阪
	3PRM60	(270235K)*	[270135]	[270835]	S271635K	静岡—東京
	WSM238	(271110K)*	[271010]	[271710]	—	那覇飛行場
	WSM239	(271314K)*	[271214]	[270835]	G280314K	鹿屋飛行場
	3PRM61	(271530K)*	[271430]	—	G280530K	東京
2月28日(水)	WSM240	272107K	272007	280307	G281220K	浜松プロペラ工場
	3PRM62	(280334K)*	[280234]	[280934]	G281734K	沖縄
	3PRM63	(280336K)*	[280236]	[280936]	G281736K	沖縄
	WSM241	280604K	280504	281204	G282043K	呉—高知
	WSM242	281159K	281059	281759	S282310K	東京

(出所)「作戦要約」より作成。

米軍資料によれば、第313航空団の2機が、M64、2発、E46、22発を豊橋にも投下したことになっている。しかし、日誌によれば「この間、実に二時間、遠くで二三度爆弾とも高射砲ともつかぬ炸裂音を聞いたが、幸にこの附近に投弾なく経過」した。

また日誌によれば、18時にも警戒警報が発令された。これはWSM232(東京)の可能性が高い。米軍資料によれば、同機が不時着したこともあって出撃時刻、帰還時刻ともに不明であるが、原田良次(1973)は、25日の「夜二〇〇〇、二二〇〇B29一機偵察来襲」(189頁)と記しており、後者はWSM233(東京)であろう(第28表)。

二月二十六日(月)

雨は昨夜のうちに上つて朝から快晴。けふ一日、警報も出さず平穏な一日を送った。敵機の侵入を見なかった代わりに、待避壕へ雨水が侵入したので大急ぎで汲み出した。この附近は高み故、浸水も少いが東の方の低地では相当ひどかつたらしい。これから雨の多い季節ともなればその度毎に汲み出すのに大変だらう。困ったことだ。

所が西へ新たに掘つた壕は前と僅三四間の距離であるに不拘、上層の赤土は同じだが下層の砂利層がサラサラしていてもろい代りに水はすぐこして仕舞ふらしく、一方は汲み出す程なのに、この方は大して湿り気もないのは勿怪の幸ひだ。

今日はその底部へ水汲の桶を入れて梅雨期に備へたり、出入用の梯子を作つたりした。掩蓋資材も中々手に入りさうもないので今暫くこの方を家財の収容に充てやうと思う。

[解説] 日誌によれば、26日は警報のない平穏な1日であった。この平穏な1日を新しい待避壕の整備に使つたようである。この壕の下層は砂利層でもろい代わりに水はけがよかったが、梅雨期に備えて水汲用の桶を入れ、出入用の梯子を作つたりしたと記した。そして、「今暫くこの方を家財の収容に充て」ることにした。

米軍資料は、気象観測爆撃機4機(WSM234～WSM237)が東京に向けて出撃したとしている。『朝日新聞』(1945年2月27日)「二十六日午前一時頃・・・一機が帝都附近に来襲、投弾した」、同紙(同年2月28日付)「廿六日午後七時頃B291機は甲府方面を経て帝都附近に侵

入投弾」したと報じている。最初はWSM234, 午後七時のはWSM235とみられる。また, 原田良次(1973)は「二二四〇警戒警報, B29一機は静岡-甲府-長野-東京都侵入」(191頁)と記している。これは日本到着想定時間とはかなりずれはあるがWSM236であろう。

二月廿七日(火)

(110) 残^{のこ}りの月が松が枝にかかつてゐる午前五時三十分, 警戒警報が暁のそらに鳴り出した。もうとつくに起きてゐたので, すぐ外にいで合図を打つ。何でも浜名湖沖合を北上する不明機があるとのことだ。処がこやつ果して敵機で, 反転して御前岬附近から東北進したらしく僅か十分か十五分でこの警報は解除になった。

侵入機一機 静岡県より東部館内に去る

[解説] 27日は写真偵察機が3PRM58(静岡-東京), 3PRM59(神戸-大阪), 3PRM60(静岡-東京), 3PRM61(東京)の4機, 気象観測爆撃機WSM238(那覇飛行場), WSM239(鹿屋飛行場)の2機, 計6機が飛来したことになる(第28表)。日本到着予想時間は, 3PRM60が08時35分, 3PRM58と3PRM59が09時49分である。WSM238については出撃時刻が不明で復路で不時着した。また, 3PRM61は出撃中止となった。3PRM59とWSM239は警報の対象にならなかったと考えられる。

日誌にあるような05時30分に警報の対象となるようなB29は見あたらない。『朝日新聞』(1945年2月28日)は27日については「午前零時頃一機関東北方地区に侵入, 投弾した」という報道のみであった。これはWSM237である。原田良次(1973)には「〇八三〇すぎ, 空襲警報のサイレン」(194頁)とだけある。

豊西村空襲記録は27日には4回の警戒警報を記録している。1回目02時19分発令~02時52分解除, 2回目05時03分発令~05時50分解除, 3回目08時43分発令~08時47分解除, 4回目09時32分発令~10時04分解除である。2回目については日誌と同様のことが言える。3回目につい

ては「味方機ヲ敵ト誤認」というコメントがあるが, それは実は2回目であったと考えれば, 米軍資料とほぼ対応するのではないと思われる。

二月二十八日(水)

(111) 午前三時半, 起きて用便中けたたましくサイレンが鳴り出した。敵機侵入を報ずる警戒警報なのだ。近頃は一機や二機の敵には警戒警報だけだから空襲警報と同様だ。すぐ外に出て合図を打つ。敵やいづこと見上げる天空には, 一点の雲もなく真丸い月が西天に輝いて居る。情報をききもらしたので敵機の行動ははつきりしないが, 何でも志摩半島をめざして北上し, それから折れて渥美半島めざしてやってくるらしい。遥かに爆音が聞へてきた。待避の合図が鳴り出したので一時壕にもぐる。然し一向近づいてくる様子がない。忽ち東南からドドドーン, ドドドーン地軸を揺がすやうな轟音が聞へて来た。一機ならもう爆弾は持つてはゐないし, それに敵機などそこらにうろついてもゐないのに待避の鐘が一しきり鳴る。暫くすると敵は浜名湖方面から脱去したらしく, 四時少し前, この警報は解除となった。

侵入一機 志摩半島より浜名湖へ

[解説] 03時30分に警戒警報が鳴った。「近頃は一機や二機の敵には警戒警報だけだから空襲警報と同様だ」という記述がある。3ヶ月以上にわたって, 敵機の来襲と空襲にさらされるなかで, 頻繁に来襲する少数機に対して, いちいち対応しきれない面と, それ以上に, 鈍感になっていることの表われとも見てとれる。このB-29は, WSM240(浜松プロペラ工場)と考えられる。米軍資料によれば, 同機は目標の浜松プロペラ工場ではなく伊東に2000ポンド一般目的弾3発を投下したとされる。日誌には「一向近づいてくる様子がない」が「忽ち東南からドドドーン, ドドドーン地軸を揺がすやうな轟音が聞へて来た」とあるが, これが爆弾なのか, 日本軍の対空砲火なのかはわからない。

『朝日新聞』は「B29一機は二十八日午前三

時半頃三重県方面に飛来した、またB29一機が同日午後一時半頃土佐湾附近を偵察した」としている。3PRM62～3PRM63は目的地が沖縄であるため警報の対象にならず、WSM242（東京）は早期帰還した。

なお日誌には、B-29をはじめとする敵機の来襲回数、空襲警報および来襲機数を整理した表が添付されている。これまでの軍情報なども合わせて日誌の著者が記録した数と思われるが、2月末日までの来襲回数111回、空襲警報発令回数30回、来襲機数1430機となっている。

三月一日（木）

十一月下旬マリアナよりB二十九の我が本土空襲はいよいよ激化されてきた。次はその統計で、即ち九十八日間に百十一回で、内空襲は三十回、一回の平均来襲機数は四十七機である。

旬別	来襲回数	内空襲警報	編隊来襲機数
十一月 下旬	五	三	一五〇
十二月 上旬	二	一	七〇
中旬	一四	八	一五〇
下旬	九	四	一五〇
一月 上旬	一八	二	一五〇
中旬	一〇	二	一四〇
下旬	一四	二	一四〇
二月 上旬	八	二	一九〇
中旬	二〇	五	一六〇
下旬	一一	一	一三〇
計	一一一	三〇	一四三〇

三月一日（木）

(112) 午前十一時へ十五分前、近畿地区から東進侵入せんとする敵一機ありとて警戒警報が発令された。空は朝からの薄曇りで無論敵の機影など見へはしない。

十一時、已に犬山附近まで来たといふ。十分後には浜名湖北方を東南進し、十一時廿分、浜名湖の南方洋上に脱去を伝へ警戒警報も解除された。

侵入一機 近畿地区より侵入 浜名湖より脱去

待避壕

昨日とうとう必要ない部分の塀をとり払い、それを資材として新たに掘った待避壕の掩蓋をつくり上げた。盛土の厚さは約八寸。それを三寸角の柱で支へ

て居る。入口が約二尺で掩蓋部が約四尺。入つて見ると中は立つて尚余裕があり、中は婆さんと並んでも楽々。底に水溜りと腰掛があり、その腰掛の下に非常用の火鉢が一つ埋めてある。入口には雨除けの板があり、それを揚げると御手製の梯子がある。入口の傍らの木へ鉄板を吊るし、中にゐても待避信号が打てるやうにした。そしてこれ迄の待避壕へ必要物資を今朝収納して置いたから、待避のときは手廻りの貴重品だけ持つてもぐればよい。兎に角これで一応の準備が完了したと思ふと幾分責任が軽やいだ感じがする。近くの加藤君も意気込んで居る。事実それ程に情勢は逼迫してゐるのだ。

(113) 午後六時四十五分、熊野灘を北上する敵一機ありとの情報なので緊張待避すると、こやついよいよ接岸して、大台ヶ原小附近を名古屋に向ふらしく、七時、警戒警報が発令された。空は晴れてゐるが東風が盛んに吹いて居る。やや暫くすると南よりを東に通過する爆音が聞へ待避の鐘が鳴り出した。新設の待避壕へ先づ入つて見ると何となく心強さを覚へる。間もなく爆音は闇のあなたに消えた。この敵は浜松、静岡を経て駿河湾から洋上に脱去したとて八時二十分、警報は解除されたが、比較的暖かさと東風の吹きしきる処、明日当り雨にならねばよいと思ふ。

侵入一機 熊野灘より侵入 駿河湾より脱去

[解説] 月が変わり3月1日になった。日誌の著者は、1944年11月下旬に空襲日誌をつけはじめで以降のB-29来襲による警戒警報の回数、そのうち空襲警報の回数、来襲した敵機の数を表にまとめた。警戒・空襲警報は、豊橋地方で発令され、彼が確認した回数を示しているし、来襲機数はラジオの軍情報を書き留めた数の合計ということになる。12月から2月の3ヵ月の平均で、1ヵ月あたり警戒警報は35.3回、同じく空襲警報9回、同じく来襲機数は426.7機であった。

3月に入って最初の警戒警報は、日誌によれば10時45分に近畿地区から東へ進む1機ということになっている。第29表のWSM244（名古屋

第29表：3月1日～5日の気象観測爆撃, 写真偵察, レーダースコープ写真任務

月日	作戦	出撃時刻 (K時)	出撃時刻 (日本時)	到着予想時刻 (日本時)	帰還時刻 (K時)	目標 (地域)
3月1日(木)	WSM244	(010342K)*	[010242]	010942	G011742K	名古屋-浜松地域
	WSM245	中止				
	WSM246	011236K	011136	011836	(020236K)	浜松
3月2日(金)	3PRM64	(020205K)*	[020105]	020805	G021605K	名古屋地域
	3PRM65	(020301K)*	[020201]	020901	G021701K	沖縄地域
	WSM247	020807K	020707	(途中中止)	S021045K	大阪
	WSM248	(021120K)*	[021020]	021720	G030120K	東京
3月3日(土)	WSM249	022257K	022157	030457	S031221K	大阪
	WSM250	(030455K)*	[030355]	031055	G031855K	沖縄
	WSM251	(030515K)*	[030415]	031115	S031915K	呉-高知地域
	WSM252	031612K	031512	032212	(040612K)	神戸
	314RSM1	031701K ~ 031736K	031601 ~ 031636	032301 ~ 032336	G040815K	名古屋(8機出撃)
3月4日(日)	3PRM66	040330K	040230	(途中中止)	S041034K	東京
	WSM253	040604K	040504	041204	S041958K	沖縄
	WSM254	(040509)*	[040409]	041109	S041909K	大阪
	WSM255	041614K	041514	042214	S050545K	広島
3月5日(月)	314RSM2	041745K	041645	050045	G050857K	東京(10機出撃)
	WSM256	050613K	050513	051213	G052115K	沖縄
	313RSM1	051250K	051150	051850	T060357K	北九州北西部海岸線 (2機出撃)
	WSM257	051330K	051230	051930	G060224K	東京

(出所)「作戦要約」より作成。

屋)は、日本到着予想時間が09時42分であるが、これは出撃時刻が不明なため帰還時間からマリアナ・日本間のB-29の平均的な往復時間を引いて出した出撃時刻をもとに計算した時刻である。往復に13時間しかかからない場合もあり、その場合は日本到着予想時間は10時42分となる。また、日誌の飛行コースからみてもWSM244と考えてよいであろう²⁷⁾。

また、「午後六時四十五分熊野灘を北上する敵一機」は、浜松をめざしたWSM246である。豊橋地方では19時00分に警戒警報が発令され、20時20分に解除された²⁸⁾。この日は「新設の待避壕へ先づ入つて見ると何となく心強さを覚えた」と、記している。「待避壕」という小見出

しの部分にあるように、2月28日にできれば避けなかったが仕方なく扉の一部取り払い、それを使って新しい待避壕の掩蓋を完成させた。「中は立つて尚余裕があり、中は婆さんと並んでも楽々」で、さまざまな工夫を重ねた結果としてある程度、満足のいくものになったようである。なお、古い待避壕には「必要物資を今朝収納して置いたから待避のときは手廻りの貴重品だけ持つてもぐればよい」状態となった。

三月二日(金)

(114) ゆうべ夜吹きに吹いた東風は、遂に雨をよんで朝から降り出した。仕方なく壕に入れてある家財をとり出す騒ぎ。終日しとしと降りつづいた。小雨

27) 『朝日新聞』(1945年3月2日付)は「一日午前四時頃B29一機松山、岡山、瀬戸内海方面に來襲、若干の投弾があった」、 「B29一機は一日午前十一時頃奈良平地および名古屋附近を偵察した」と報じている。04時頃のB-29については不明、11時頃のB-29はWSM244といえる。

28) 『朝日新聞』(1945年3月3日付)には「一日午後三時頃艦上機二機宮崎県に來襲、又同日午後七時頃B29一機が紀伊及び東海地方海岸線に沿い侵入したが投弾することなく退去」とある。

にうつとうしいこと限りなし。夕食を終つて一服してゐると、潮岬方面から侵入する敵一機ありとの情報に続いて午後六時十分、警戒警報が発令された。小雨は尚もふりつづいて居る。軒下に立つて情報をきくと、この敵は新宮まで来て旋回してゐたがそこで向をかへ鳥羽から知多郡を経、名古屋を脇目に足助から南信に侵入したとて三十分許りで警報は解除になつた。其後敵は尚北進したと見へ、松本附近から南進し富士山の西側を通り伊豆半島を経て、南方洋上に脱去したといふ。明日あたりまた大挙してくる前提かも知れぬ。いまいましいことだ。

侵入一機 愛知、長野、静岡、三県下を経て脱去

[解説] 朝から雨となり、古い待避壕に入れてあつた家財を取り出すという作業から始まつた。名古屋地域に向かつて3PRM64については警報が発令されなかつたようである。また、3PRM65（沖縄地域）は、飛行コースの関係で通常は警報の対象にはならない。この日の警戒警報の発令は、日誌によれば18時10分である。これはWSM248（東京）に対するものといえる²⁹⁾。

三月三日（土）

空襲も度重なれば誰も彼も馴つこになつて、女子供迄またかといつた調子で余祐綽々。これこそ人事を尽して天命をまつといふ度胸なのだ。この度胸こそ幾回敵機が頭上めがけて迫り爆弾で地軸が揺がうが、焼夷弾が炎々と燃え上がらうが、驚きもせぬ慌てもせぬ中に、ただひとつ我々を悩ますものがある。それは雨だ。実際、雨の降る中の空襲位いやな気持ちのするものはない。現に昨日もそのいやな思ひをしたものだ。それは私一人だけではないらしい。

春近くこれから雨は繁々^{しげしげ}ふることだらう。それを思ふと全くうんざりする。待避壕も地窖も水浸しで、身を隠す所も家財を取めることも出来ないやうな場合もあらう。屋内に作つたのでは安全率が低いし、

屋外だと雨に悩まされる一得一失、一の力ではどうしやうもない。お互いに愚口の一つもいいたいくなるだろうではないか。

昨日一日ふり続いた小雨は夜に入つて本降りとなつたが、夜半を過ぎると漸く収まつた。今朝起きて見ると、果して前の壕は二尺からの浸水だ。西の方はどうかと見るとこれは不思議、一滴も残つてはゐない。嬉しさに感謝の気持ちで胸が一杯になる。天は自ら助くるものを助く。老人が精魂をつくして掘つた壕だけに御蔭に違ひない。

朝食前から前の壕の汲み出しにかかり、ひる前に一通り家財を収容して置いたが、これから三日にあげずこんなことをするのだと思ふと情けなくなるが、これも戦争だ。やれる限りやるより仕方がない。

三月三日（土）

(115) 昼食の箸を置いたとたん丁度十二時、大崎のサイレンが先づ鳴り出したので早速合図の太鼓をうつ。少し遅れてラジオが発令を知らせ市のサイレンも鳴り出した。壕の水は朝のまに汲み出し、家財まで収納してある。中には慌てて汲み出してゐる人もある。不用意なことだ。情報によると浜名湖の南方を北上する不明の一機があるといふ。先の廿五日の空襲から今日は六日目。いよいよ編隊でやつてくる前提かと緊張待機したが、十五分許りでこの不明機は友軍機と分り、あつさり警報の解除を見たがまだまだ油断はなりかねる。

これは友軍機だつた

(116) 夜半に近い十一時を過ぎたころ、突如鳴り出した警戒警報のサイレンに眠りを破られた。起きて外に出ると、二十日の月が東天から静かに下界を見守つてゐるのに、何となくただならぬ気配が感ぜられるので、婆さんと待避の準備にかかる。晩方の雨模様には壕にあつた家財はとり出してあり、今となつては間に合はない。ままよと神社関係の書類など二三を持つて壕にもぐる。情報によると、志摩半島から侵入した敵は次々にこちらを向ひてくるらし

29) 『朝日新聞』（1945年3月3日付）は「二日午前九時頃 B29一機が明石附近に侵入偵察の後退去したと報じた」。これは3PRM64と考えられる。

い。果して先登の一機が南寄りを西より浜松方面に向ふらしく爆音が聞へて来た。待避の鐘が鳴る。それが通過して間もなく第二の爆音が前よりも一層大きく聞へてきた。また待避の鐘が鳴る。こやつ市の上空を旋回してゐると見へ遠く近く爆音を轟かせ、はては真上に迫つて来た。いよいよ被爆と落下音に注意してゐたが、幸に投弾した模様もなく暫くして何れかに立ち去つた。それから後も一二回遙かに爆音を聞いたが、敵は総て五機で浜松から西、近畿地方へかけて我が本土上空に乱舞し、一時間余りの後、漸くその影をかくした。かくして〇時半、警戒警報の解除をみたが、このやうに夜間一機づつで分散侵入し思ひ思ひの行動をとることは、やがて来るべき夜間大空襲に敵の用ふる戦法かもしれぬ。こころすべきことだ。

侵入六機 五機は名古屋へ 一機は坂神へ

[解説] 3月3日は「ただひとつ我々を悩ますものがある。それは雨だ」という記述ではじまる。そして「待避壕も地窖も水浸しで身を隠す所も家財を収めることも出来な」くなる可能性について指摘している。案の定、2日からの雨で古い待避壕は二尺(約60cm)の浸水で、朝のうちに汲み出さねばならなかった。救いだったのは新しい待避壕が浸水を免れたことであつた。

この日は12時に警戒警報が発令された。まず大崎(海軍航空基地)のサイレンが鳴り、間もなく市のサイレンが鳴つたと記しているが、これは友軍機とわかり15分後解除された。第29表によれば、午前中にWSM249(大阪)、WSM250(沖縄)、WSM251(呉・高知地域)が来襲しているが、いずれに対しても警戒警報は発令されなかつたようである³⁰⁾。

その後、23時過ぎに警戒警報が発令された。「敵は総て五機で浜松から西、近畿地方へかけ

て我が本土上空に乱舞し一時間余りの後漸くその影をかくした」。00時30分に「警戒警報の解除をみたが、このやうに夜間一機づつで分散侵入し思ひ思ひの行動をとることは、やがて来るべき夜間大空襲に敵の用ふる戦法かもしれぬ」と不安を新たにした。『朝日新聞』(1945年3月5日付)は「三日午後十一時すぎより十二時頃にわたり、マリアナを基地とするB29計六機は五次にわたり本土に来襲、そのうち五機は名古屋方面に飛来し、名古屋、大垣等に投弾他の一機は大阪、神戸に若干の投弾を行つた」と報じている。また、この他に「B29一機、三日午後十時半ごろ南九州に来襲、北九州を経て山口県下に若干登壇した」としている。

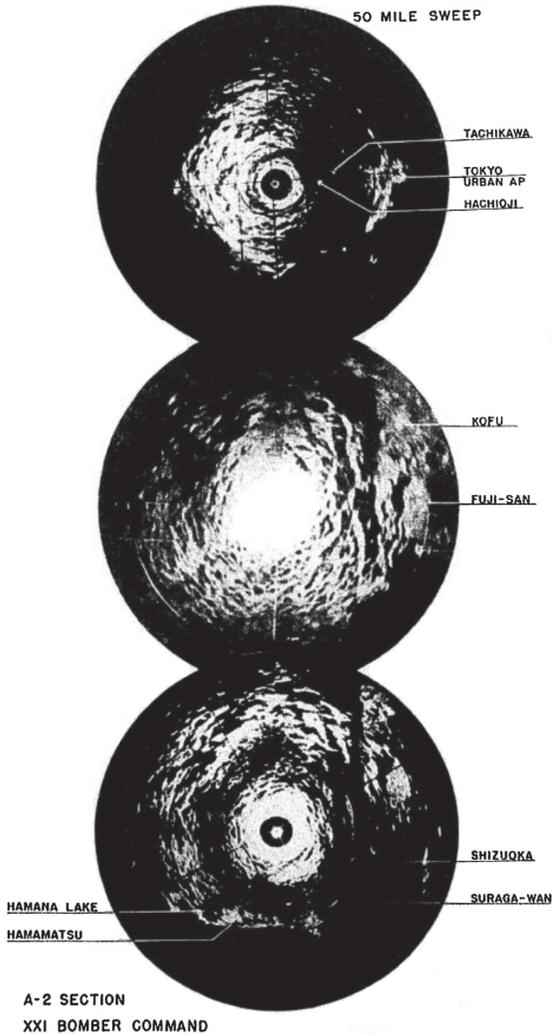
22時30分頃のB29はWSM252(神戸)と考えられる。23時過ぎから24時頃の複数のB29は314RSM1であろう。RSMは作戦としては初めて「作戦要約」に現れたもので、Radar Scope Photo Missionの略語、すなわち、レーダースコープ写真の撮影を任務としたが、特定の目標を爆撃するため爆弾も搭載した³¹⁾。米軍資料によれば、314RSM1は名古屋の愛知航空機永徳工場を目標として8機が出撃し、500ポンド一般目的弾39発、500ポンド焼夷弾24発を高度25,000フィートから第1目標および臨機目標に投下したとされている。この任務は、それまでの気象観測爆撃機や写真偵察機が通常1機によるものであつたのに、日誌もふれているように、複数機が「夜間一機づつ分散侵入」するなど夜間空襲を匂わせるといふ意味で米軍の対日爆撃における変化の兆候とも考えられたようである。

第40図は、2月25日の東京市街地を目標に実施された大規模爆撃に関する「作戦任務報告書」No.38から引用した実際のレーダースコープ写真である。浜松から甲府・富士山を経て八

30) 『豊西村空襲記録』もこの3機については報じていない。『朝日新聞』(1945年3月4日付)は、「三日午前五時半頃(B29)一機が土佐湾に侵入投弾の模様」と報じた。これはWSM249であろう。WSM251に該当する日本側の記録は見当たらない。

31) 写真偵察任務などでは、すでに目標上空が雲に覆われている場合などに、または写真撮影と並行してレーダースコープ写真の撮影が行われていた。

APPROACHES TO TOKYO
ACTUAL SCOPE PHOTOS
50 MILE SWEEP



第40図：東京までの侵入経路のレーダースコープ画像

(出所)「作戦任務報告書」No.38。

王子、立川、そして東京市街地のアクセス・ポイント (AP) までの侵入経路を示したものである。日本本土が雲に覆われている場合や夜間の場合は、AN-APQ-13という全方位レーダー

により映し出された画像をたよりに目標地点まで航行、爆撃を行った³²⁾。そのためには、レーダー手は一定の訓練や慣れが必要とされた³³⁾。なお、同画像の日付は1945年3月となっている。

三月四日 (日)

(117) 午前七時十分、朝食の箸をおくか置かないかに警戒警報が発令された。相憎朝から猛烈な東風が吹いて雨模様だ。情報によれば浜松南方を北上する敵機があるといふ。近頃は敵も編隊を組まず、各個侵入して到る処を荒しまわる戦法をとり出したので、油断ならずと婆さんに手伝はして家財を壕に入れ待避の準備をする。

まもなく敵は次々に分散侵入してその数も八機に達し、そのうち一機が浜松からこの辺にかけて旋回中らしく、幾度となく我々の頭上を侵してくる。然しその爆音も風の音に消されて途切れ途切れだ。そのうちにこやつが投弾したであらう。遠くから炸裂音が地面を伝はつて来た。頭上の爆音は遠く近くいつまでも続き、風の咆哮と共に物情頗る騒然だ。八時三十分頃、何回目かの爆音が頭上に迫ると共に厭な落下音が聞える。ソレといふまもなく五六発続いて炸裂し大地がゆらぐ。たしか東の方らしい。八時四十分になると、とうとう空襲警報のサイレンが鳴り出した。間もなく東からやつてきた奴が北方で投弾したと見へ、炸裂音が地響きをたてて聞へてきた。畜生またやつたなと思ふと雲上から機関銃の轟き。友軍機の邀撃であらう。やや暫く続いたが、やがて風のために消されて仕舞つた。

そのころ道に雨となつてバラバラふつて来た。風は相変わらず咆哮をつづけ頼りにするラジオ情報がさつぱりききとれない。従て敵機の行動など不明のまま壕中にじつとして居るより仕方がない。それでも九時三十分になつて空襲警報が解除され、やれやれと壕を出ると、続いて警戒警報も解除され、この来襲

32) 奥住喜重 (1988)『中小都市空襲』三省堂、45～48頁。

33) C・E・ルメイ / B・イエーン / 渡辺洋三訳 (1991)『超・空の要塞：B-29』(朝日ソノラマ)は、「陸と海の反射波のコントラストが地点選定の主要材料になるため、レーダー爆撃時の目標は沿岸部に限られていた。・・・熟練整備員による指導学校に加えて、レーダー学校を創設し、以後は急速に〔映像解読の技量の〕向上をみた」(195頁)と記している。

も一段落をつけたが、その間実に二時間半、爆音は頭上に轟き、風の音を落下音と間違えて幾度となく眼や耳を押へた始末。実にいやな思ひの連続だった。

来襲百五十機 主として帝都を爆撃 別に欺瞞的に少数機を以て豊橋浜松に来襲

(118) 朝から見ると風も少し軟らいで来た。中食を終へて一服してゐると〇時半、また警戒警報だ。情報をきくと畿内地区から侵入せんとする敵一機があり、上野附近を旋回中だといふ。やがてこちらへくるものと待機したが、遂にくることなく尾鷲附近へ出た。もう来ないと思ふと、果して僅か十五分許りで警報の解除を見たのでやれやれ。

侵入一機 侵入せず脱去

(119) 時もゆふべと同じ夜の十一時半、またもや警戒警報のサイレンに夢破られてハネ起きる。半弦の月が今山の端を出たところだ。空は晴れ星はまたたいてゐるが、北風が吹き捲つて寒いこと夥しい。ゆふべの敵の戦法を思ふと、今夜も長いなとすぐ待避の準備をする。

果して敵は五機で分散的に浜名湖附近から侵入して来たらしい。風の音に和して例の爆音が聞へてきた。待避の鐘を合図に壕にもぐる。然し敵は余り接近することなく何れに去つたと見へ、程なく爆音は風に消へて仕舞つた。情報は次々に発表せられるが、風に妨げられ全然聞へないので壕中にじつとしてゐるより仕方がない。聞けば昨日、多米と下条と牛久保と三ヶ所が被爆したさうだ。くる度毎に多少のお土産をもつてくるから油断はならぬ。それに皇軍の精鋭を以てしても尚、連日連夜敵機を頭上に迎えねばならぬ始末に物量の力の大きさをつくづく感ぜざるを得ない。

こんなことを考へながら待つこと凡そ一時間半、午前一時になつて漸く警報が解除され、冷へ切つた体を再び寢床に横たへた。

今我が方が全体優勢なら敵を本土に寄せつけはしない筈だ。然るに現実には敵は日夜平然と我が本土上空を侵し、そのための犠牲も決して少々ではない。

この敵の優勢さも論じつめれば物量の力で我寡兵よく鮮血を以て戦つてゐる。然し荒漠たる戦線にはそれにも限りがあり、次々に一壘陥り一島を失つてゆく。いくらいきり立つた所で素手では戦へない。そこで国を挙げ当面の需用に応ずるため飛行機を作つてはゐるが、それとて敵の生産に較べては、その何パーセントにしか当らない口惜しさ。こんなことで果してよいだらうか。

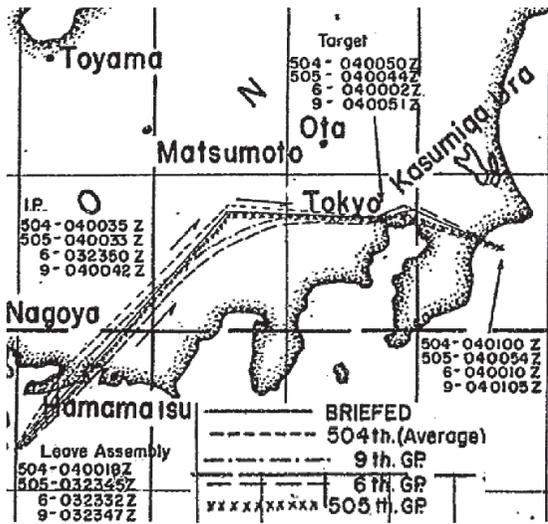
敵の最も恐れる所は兵員の消耗らしい。そこで物量の力を以て焦土戦術に短期決戦を焦つてゐる。ルソン島の戦ひは未だ帰趨明かでないが、硫黄島は絶望に近く、それに呼応して敵の我が本土空襲はいよいよ熾烈化し、手をかへ品をかへて主力を以て帝都を襲撃したのみでなく、これまで午后にやつて来たのを奇襲的に朝からやつて来た上、油脂焼夷弾をエレクトロンに代へ、又小型爆弾に大型を混用したりしてゐる。今後とてどんな新手を用ひてくるかも知れぬ。その場合臨機応変の処置をどうしても腹が据つてゐなければ駄目だ。

自分は今つくづくとそれを考へて居る。

[解説] 3月4日は、07時10分に警戒警報の発令となった。この日、米軍は東京の中島飛行機武蔵製作所を第1目標、東京市街地を第2目標とする大規模爆撃を実施した。この日出撃したのは第73航空団の114機と第313航空団の78機、計192機であった。出撃時間は031511Zから031646Z(日本時間4日00時11分から同日01時46分)でそれぞれサイパン、グアム両基地を離陸した。搭載爆弾は第73航空団がM64、987発、M66、2000ポンド一般目的弾111発、第313航空団がM64、238発、M17A1、673発であった。

第73航空団に指示されたコースは、駿河湾の御前崎寄りから上陸して、甲府をIPに目標に向かい、爆撃後は九十九里浜から太平洋上へ抜けるものであった。第313航空団は、紀伊半島東部の大王崎をかすめて浜名湖方面から上陸、甲府をIPとして目標に向かい、爆撃後はやはり九十九里浜から太平洋へ脱出するコースを指示された(第41図参照)。

爆撃部隊は、目標上空は雲に覆われていたた



第41図：3月4日の第313航空団の飛行コース
(出所)「作戦任務報告書」No.39.

め、第1目標の爆撃をあきらめ、159機が雲量10分の10の雲上、高度25,100～28,900フィートから第2目標である東京市街地を爆撃した³⁴⁾。また17機が最終目標を、1機が臨機目標を爆撃した³⁵⁾。なお、早期帰還機15機、損失機1機であった。

最終目標を爆撃した17機の投弾場所は、浜松、静岡、清水、豊橋、大宮などで、浜松に対しては、9機が計92発を、豊橋に対しては第313航空団第6爆撃群団のB-29、1機がM64、11発を投下した。日誌によれば、被弾したのは、多米町、下条町、牛久保町であった³⁶⁾。日誌では「八時三十分頃何回目かの爆音が頭上に迫ると共に厭な落音音が聞える。ソレといふまもなく五六発続いて炸裂し大地がゆらく。たしか東の方らしい」との記述のあとに、「八時四十分になるととうとう空襲警報のサイレンが鳴り出した。間もなく東からやつてきた奴が北

方で投弾したと見へ、炸裂音が地響きをたてて聞へてきた」と続いている。この日の空襲警報の発令もかなり遅かったようである。09時30分に空襲警報が、間もなく警戒警報も解除となった。

この日の爆撃は、これまでの爆撃を踏襲したものと考えがちであるが、『朝日新聞』(1945年3月5日付)は「編隊の夜間進発可能」との小見出しで次のような指摘を行った。「朝八時にB29の編団が来襲した点にわれわれは一応注目の必要がある、・・・これまでの編隊侵入が午後であることは彼等が朝となつてマリアナ基地を出発することを示してゐる、夜間、多数機の離陸のためには飛行場の設備、または乗員の技量において困難があつたためと考へられるが、・・・これまでになかつたB29「編隊夜間進発」を可能にして来た事実を注目せねばならぬ・・・今後夜間空襲が相当多数のB29をもつて・・・来襲し得ること・・・考へておかねばならない」。夜間の出撃が困難だったかどうか不明であるが、夜間空襲については1944年11月29日の東京工業地帯を第1目標とする第73航空団のB-29、29機によるものが唯一であった。記事から読み取れるように、日本軍部はB-29の夜間空襲に大きな不安を抱いていたふしがある。

日誌によれば、12時30分に警戒警報が発令されたが、これはWSM254(大阪)であろうか。他の日本側資料には記録がない。その後、23時30分に三度目の警戒警報が発令された。「敵は五機で分散的に浜名湖附近から侵入して来たらしい」が、何事もなく翌日の01時に解除となった。『朝日新聞』(1945年3月6日付)は、「B29一機は四日午後十一時頃より三十分互り南九州方面にも来襲、海中に投弾のち脱去」と報

34) 原田良次(1973)は、「〇八四〇より・・・B29一五〇機で東京へ。しかし、当隊雲量多く出動不能。東京の空に投弾の音凄まじく、姿の見えない雲上の敵編隊の動静を伝える東部軍情報の不気味さ」(198頁)と記している。この日「北多摩から下町の手側までを攻撃され・・・死傷者一〇〇三名」(199頁)が出た。

35) この日の爆撃でダメージを受けたB-29、1機がはじめて硫黄島に不時着した。同機は補修と燃料の供給を受けて基地へ帰還した。

36) 名古屋空襲を記録する会(1985)には、「多米町山林二〇坪消失」(17頁)の記述がある。

じた。これはWSM255（広島）と考えられる。

日誌は、この日の最後に「今我が方が全体優勢なら敵を本土に寄せつけはしない筈だ。然るに現実には敵は日夜平然と我が本土上空を侵し、そのための犠牲も決して少々ではない」、「この敵の優勢さも論じつめれば物量の力で」と記すと同時に、「ルソン島の戦ひは未だ帰趨明かでないが、硫黄島は絶望に近く、それに呼応して敵の我が本土空襲はいよいよ熾烈化し」と戦況への不安を隠そうとしなかった。

三月五日（月）

(120) 午後六時十五分鳥羽半島を北上する敵二機ありとて、警戒警報が発せられた。もうあたりは暗闇が漂ひはじめた。夕食はとくに済んで居る。いつでも来いとまち構ると、暫くあつて南方に爆音が聞へあたりで待避の鐘が鳴る。しばし壕にもぐつて待つと爆音は東方の空に消えてゆく。情報によるとこれが一番機で、浜名湖附近で旋回した後、やがて東進して東部管内に入り、二番機は鳥羽沖から東北進し浜名湖附近で反転、南方洋上に脱去したといふ。かくて僅か三十分でこの警報も解除になつたがもっと多数くるものと予想したのに僅か二機とは意外だつた。

〔解説〕米軍資料によれば、3月5日には314RSM2（東京、10機）、WSM256（沖縄）、WSM257（東京）、313PSM1（2機、北九州）の計14機が飛来したことになる。314RSM2は、東京の中島飛行機武蔵製作所を目標にグアムを041745Kに出撃し、5日の00時頃日本に上陸、8機が500ポンド一般目的弾35発、500ポンド焼夷弾16発、56ポンド閃光弾14発を第1目標に投下した。1機は目標上空で投弾できず、1機は早期帰還した。侵入ヶ所が関東地域だったためか、豊橋では警戒警報の対象にならなかった。『朝日新聞』（1945年3月6日付）は、「五日早曉B29十機はそれぞれ一機づつ浜松附近より本

土に來襲、午前零時半頃より同二時半頃にわたり逐次帝都に侵入、爆弾、焼夷弾を投下・・・夜間來襲機数が漸次多くなつて来たが、これは夜間の大挙來襲を企図するものと予想され警戒を要する」と報じた。

日誌によれば、18時15分に再び警戒警報が発令された。「鳥羽半島を北上する敵二機」とあるのと、時間的にみて313RSM（2機、北九州西部海岸線）と考えられる。米軍資料によれば、両機は九州海岸線のレーダースコープ写真を327枚撮影し、うち1機が500ポンド一般目的弾4発をJoji（門司か？）に投下した。日本機の反撃はなかったとしている。豊橋地方の警戒警報はわずか30分で解除となつた。WSM256、WSM257については豊橋では警戒警報の対象にならなかった³⁷⁾。

これを書き初めた紀元節から二十三日目のけふ敵の來襲は八十回からとうとう百二十回になつたので例により第四冊目に移る。

この二十三日間四十回のうち空襲はB二十九が四回、艦載機が三回であと三十三回は警戒警報に止まつた。來襲延機数はB二十九が四百四十、艦載機が延千六百で、この間に向山町が、十七日大崎の飛行場がまた三月四日多米町と下条町とがやられた。但し、被害は僅少で市外にも近接地方に数ヶ所あつたらしい。しかし幸いなことは、より以上の損害を遺した地震の方が全く納まつて、もう顧慮を要せぬやうになつたことだ。然し何分にも來襲は昼夜を分たず頻繁で、睡眠不足も手伝ひ仕事の捗らないのには閉口だが、国をあげての戦争にこんなことで屁古垂れてなるものかと頑張りをつづける。

昭二〇、三、五夜記

昭和十一年七月、頼りにする一人子に死なれてから一昨年までの七年間を廃人同様に暮して来た私ではあるが、その年の昏から市の依囑をうけて市内百余社の御由緒改訂に当り、昨年一年で大体をつくり

37) 『朝日新聞』（1945年3月6日付）には、「敵B29一機は五日午後七時ころ関東地区に來襲した」とあり、これはWSM257である。

上げ、続いて今、神社誌の編纂に当つてゐる。一方、昨年三月から隣組長に推され日々繁雑な事務を処理しつつある上に、隣保班長を助けて防衛の任にも当り、更に人々の勧めでこの空襲日誌をも日々書き続けてゐる。

こんな風で私の一日は可なり忙がしいが、お蔭で虚弱だつた老躯も近来めきめき健康をとり戻し昨年以来風邪一つ引かず、まして病気で寝たことなど一度もない。これは全く神様の思召であるに違ひない。実をいへば、私は一日も早く此の世を去つて先立つた子供の後を追ひたいのだ。然し中々神様の御免^{ゆる}しが許りか、今では色々の仕事と健康とを御授けになり日々御鞭撻を頂いて居る。私はこの思召のまにまに、最後の御奉公として人のため、引てはお国のためになることなら力のある限り何でも努める決心だ。従て神様の御恵みに生きて来たものの如くすべき道であるやうに思ふ。

私はこんな考へから全力のあらん限りを社会のために投げ、一日一日近づく死期を待ちたい。それが今の私の心持ちの全部だ。 昭二〇、二、十五誌

子」であつた哲夫は昭和11年7月12日に病死した。

(つづく)

[解説] 3月5日の夜、日誌の筆者は敵機の来襲が120回となつたのを機に日誌の三冊目を終了、四冊目に入ることにした。米軍機による攻撃は、日本軍の情報米軍機撃墜を喧伝しているにもかかわらず、ますます増強される気配すらあつた。また、おびただしい数の艦載機の来襲は大きな衝撃を与えたはずであつた。さらに、3月に入ってB-29来襲のパターンに変化の兆しが見え始め、夜間空襲の可能性が高まつたことも大きな不安材料となつた。救いは豊橋地方の被害がそれほど大きくなかつたことであろうか。

なお、第三冊の最後に2月15日付の雑感を添付している。一人息子に先立たれた悲しみが、「神様の思召」、すなわち神社史の編纂、隣組長の事務、防衛の任、そして空襲日誌の執筆といった多忙な日々のおかげで軽減されているとしている。豊田氏は、妻志などの間に明治42年長女ひで、明治44年次女勝代(かよ?)、大正9年に長男哲夫をもうけた。「頼りにする一人